
IS ～境界式～

デュオ・イグニス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS〜境界式〜

【Nコード】

N0265T

【作者名】

デュオ・イグニス

【あらすじ】

ある日、蒼崎橙子に一つの依頼が届いた。

それは最近話題になっていたISに関する極秘依頼だった。

両儀式と黒桐鮮花はIS学園へと橙子の指示により入学する――

ISのほうは無知識でも大丈夫ですがらつきよを知らない結構難しくなってくるかもしれません。

ブローグ

願いは願えば叶うモノ。

願わなければ叶わないモノ。

暗い暗い闇の中、

暗いと黒いを捜し歩く。

ああ、それは鋭く光る刃でもなく、ただ黒い何か。

でもその何かがわからない。

だから探す。

私にはそれしかできないから。

オレが生きるために必要だから。

「お前はそんなんじゃないだろう？」

問いかけてられても、私はちつとも耳を貸さない。

問いかけてられても、オレは鬱陶しく思うだけだ。

「ねえ、ここはあなたのいるべき場所じゃないよね？」

問いかけられた質問に私は首をかしげた。

問いかけられた質問にオレは頷いた。

でもまだここにいるしかない。

きっと、元に戻るためにはピースが足りていないんだ。

そう私は肯定する。

だからオレもここにいます。

私に――オレに足りていない穴を埋め続けるために。

ああ、それはなんて幸福な作業だろう――。

ブローグ（後書き）

ちょっと意外な組み合わせかもしれませんが、友人のリクエストに沿ってやってみようかなと思います。

クラスメイトは全員女（前書き）

これから何幕かまではほとんど原作の文に継ぎ足した感じです。
徐々にらっきよと絡みが深くなってきてからだと変わる可能性が高いのでご了承ください

クラスメイトは全員女

「全員揃ってますねー。それじゃあSHRはじめますよー」

黒板の前でにつこりと微笑む女性副担任こと山田真耶先生（さつき自己紹介していた）。

身長はやや低めで、生徒のそれとほとんど変わらない。しかも服はサイズが合っていないのかだぼつとしていて、ますます本人が小さく見える。また、かけている黒縁眼鏡もやや大きめなのか、若干ずれている。

なんというか、『子供が無理して大人の服を着ました』的な不自然さ……というより背伸び感がするんだが、そう思うのは俺だけなんだろうか。

「それでは皆さん、一年間よろしくお願いします」

「……………」

けれど教室の中は変な緊張感に包まれていて、誰からも反応がない。

「じゃ、じゃあ自己紹介をお願いします。えっと、出席番号順で」

ちよつとつろたえる副担任がかわいそうなので、せめて俺くらいは反応しておこうと思わなくもないのだけれど、いかんせんそんな余裕はない。

なぜか。

簡単だ。俺以外のクラスメイトが全員女子だからだ。

今日は高校の入学式。新しい世界の幕開け、その初日。それ自体はいい。むしろ喜ぶべきところだ。

だがしかし、問題はとにかくクラスに男が俺一人という点だ。

（これは……想像以上にきつい……）

自意識過剰ではなく、本当にクラスメイトほぼ全員からの視線を感じる。

だいたい、席も悪い。なんで真ん中&最前列なんだ。めちやくちや目立つ上に否が応でも注目を浴びるじゃないか。

だが唯一の救いが一つあった。

俺以外にも一人、俺ほどじゃないが注目を浴びている人物がいた。

そいつは窓際の後ろから二番目というベストポジションで、頼杖をついて、窓から外を眺めていた。

どうやら、先生の話は半分も聞いていないようだった。

何故、彼女が注目を浴びているか。

それは、彼女の顔があまりにも中性だったからだ。男が見れば美女に、女が見れば美男に見えるだろう。

雑に切りそろえた髪は特に性別を不明なものにしていく。

ただはつきりと彼女が女子だと分かった理由は、かなり単純明快で制服が女性用そのものだったからだ。

それに、言い方はなんだが、胸に膨らみが見て取れた。

俺はちらりと窓側の前列の方に目をやる。

「……………」

何かしらの救いを求めての視線だったんだが、薄情なことに幼なじみの篠ノ之箒はふいつと窓の外に顔をそらした。なんてやつだ。これが六年ぶりに再会した幼なじみに対する態度だろうか。……いや、もしかして俺嫌われてるんじゃないか？

「……くん。織斑一夏くんっ」

「は、はいっ!？」

いきなり大声で名前を呼ばれて思わず声が裏返ってしまった。案の定、くすくすと笑い声が聞こえてきて、俺はますます落ち着かない気分になる。

別に俺は女子に対する苦手意識はない。ないけど、でも限度ってものがあるだろう。ラーメン好きだって毎日三食ラーメンだったら

三日で飽きるだろ。いや、わからんけど。俺そこまでラーメン好きじゃないしなあ……って、そういう話じゃない。

ともかく、クラスで男は俺だけ。他の生徒三十一名が女子。副担任も女性。担任は……知らないけど、女性らしい。らしいというのは未だに顔を出さないからだ。何してるんだろうね。

「あつ、あの、お、大声出しちゃってごめんなさい。お、怒ってる？怒ってるかな？ゴメンね、ゴメンね！でもね、あのね、自己紹介、『あ』から始まって今『お』の織斑くんなんだよね。だからね、ご、ゴメンね？自己紹介してくれるかな？だ、ダメかな？」

気が付くと副担任の山田真耶先生がぺこぺこ頭を下げていた。しかしあんまり頭を何度も下げるので、微妙にサイズの合ってなさそうな眼鏡がずり落ちそうになっている。そしてまた俺はそういうどうでもいいところばかり気になっていた。という過去の人は本当に年上なんだろうか。同年といわれれば受け入れてしまいそうだ。

「いや、あの、そんなに謝らなくても……っていうか自己紹介しますから、先生落ち着いてください」

「ほ、本当？本当ですか？本当ですね？や、約束ですよ。絶対ですよ！」

がばつと顔を上げ、俺の手を取って熱心に詰め寄る山田先生。……あの、またすごい注目を浴びているんですが。

しかしまあ、すると言った以上、男子たるもの引くわけにもいかない。それになにより、最初で溝を作ると二度とこの環境には馴染めないと見た。

しっかりと立って、後ろを振り向く。

(うつ……)

今まで背中に感じていただけただけの視線が一気に俺に向けられているのを自覚する。なにせさつき薄情にも俺を見捨てた筈でさえ横目でこっちを見ている。

こちらを見ていない奴がいるとすれば、そう、窓際後列2番目のポジションにいる彼女だけだ。

さすがにこんな風に注視されると、いくら女子に苦手意識のない俺だつてたじろぐ。いくらカレー好きだつて——いや、その話はいい。

「えー……えっと、織斑一夏です。よろしく願います」

儀礼的に頭を下げ、あげる。——ちょっと待て、なんだその『もつと色々喋つてよ』的な視線は。そしてこの『これで終わりじゃないよね?』的な空気はなんだ。

そんなにしゃべることないぞ。無趣味つてわけじゃないが、別に万人に聞いてほしいってほどでもないし、だいたい初対面でいきなりそんな趣味の話とかされたら困らないか?俺、いきなり自己紹介でサボテンの飼育がと株分けが趣味です!って女子いたら軽く引くぞ。

ちなみに俺の趣味はサボテンの飼育と株分けではない。念のため。

「……………」

だらだらと背中に流れる汗を感じる。どうしたらいい、何を言え
ばいいんだ。

というか、なんで俺ここにいるんだ——？

「うー、寒っ……………」

二月の真ん中、俺は中学三年。受験のまつただ中だった。

「なんで一番近い高校の、その試験のために四駅乗らなきゃいけないんだ……。しかも今日、超寒いじゃねーか……………」

昨年起きたカンニング事件のせいで各学校が入試会場を二日前に
通知するという政府のお達しはそりゃあ無茶苦茶なんだが、何せ俺
はただのどこにでもいる中学三年。何を言えるというのか。せいぜ
いこうやって愚痴りながら試験会場に向かうのが関の山だ。

俺が受けようと思っているのは、自宅から近い・学力真ん中・学
園祭が毎年あるという私立藍越学園。

特に何が良いかというと、私立なのに学費が超安い。格段に安い。

なぜか。簡単だ。この学園の卒業生の進路、その九割が学園法人
の関連企業に就職するからだ。

一時期の就職氷河期と呼ばれた時代ではないにせよ、卒業後の進

路までケアしてくれるのはありがたい。

しかも優良企業が多いのがまたいい。そして地域密着型。ある日突然僻地に飛ばされる心配も皆無。すばらしい。

「いつまでも千冬姉の世話になってるわけにもいかないしなあ……」

うちはまあ、ちょっとした事情で両親がいない。年の離れた姉が養ってくれているが、正直なところ長年そのことには引け目を感じている。

幸い、千冬姉の稼ぎがいいから貧乏ではないけれど、それがまた無理をさせているようで心苦しい。

本当は中学を出てすぐ働きたかったのだけれど、姉の力——おもに腕力——には勝てず、現在受験生というわけで。

でもまあ、この私立藍越学園に受ければ就職も決まったも同然。千冬姉に楽をさせてやれるというものだ。——まあ、本人が楽しみたいかどうかじゃなく、俺がそうしたいからするだけなんだけれども。

「……先のことはとりあえず受かってから考えよう」

この一年の猛勉強のおかげもあって模試での判定はA。普通に受ければ普通に受かるはずなので、俺はたいした緊張もなく会場に入る。場所は名前だけは知っているけどどこにあるか知らないという典型的な公共事業の産物こと多目的ホール。私立が市立の施設を借りるというのもおかしい話なんだが、そこはまあ地域密着型というアレだ。大人のアレコレだ。

「えーと……あれ？これ、どうやって二階に行くんだ？」

いかん、迷った。というか、なんて分かりにくい構造をしているんだ。設計は地域出身のデザイナーに頼んだらしいが、それもまた地域密着型なのだった。

「しかしこの、『常識的に作られない俺カッコイイ』的な感じはなんなんだ……。階段はどこにあるんだよ……」

真剣に、迷路だと言われれば騙されるレベルだ。なんでこんなにわかりにくいうえに案内図がないのか。あの一面ガラス張りの廊下は空調効率落ちるだけじゃないのか？この意味なく壁に貼られたタイルは地震の時危険じゃないのか？あの埋め込み型の証明はランニングコストかかるんじゃないのか？ていうか交換しづらくないか？無駄に天井高いし。うーん……。

「……………」

中学三年にもなって迷子。——ダメだ、恥ずかしすぎる。

「ええい、次に見つけたドアを開けるぞ、俺は。それでだいたい正解なんだ」

おっと、いいところにドアが。ちょっと入りますよ？

「あー、君、受験生だよな。はい、向こうで着替えて。時間押しているから急いでね。ここ、四時までしか借りれないからやりにくいつたらないわ。まったく、何考えて……」

部屋に入った途端、神経質そうな三十代後半の女性教師に言われる。どうも相当忙しいのか、その忙しさで判断能力が鈍っているのか——おそらくその両方——、俺の顔をみずにぱっぱと指示だけして出て行った。

（着替え？はて、今日日の事件は着替えまでするのか？ああ、カンニング対策か。大変だなあ、どこの学校も）

そう思ってカーテンを開けると、奇妙な物体が鎮座していた。

なんていうか、『お城に飾ってある中世の鎧』だ。しかも、忠誠を誓う騎士のようにひざまずいている。

厳密には細部が甲冑とは違うし、たぶん人によつては鎧という印象は受けないだろうけれど。とにかく、それに似た印象の『何か』が置いてあった。

それは人型に近いカタチをしていて、使用されるときをただ黙って待っている。

——知っている、これは『IS』だ。

正式名称『インフィニット・ストラトス』。宇宙空間での活動を想定して作られたマルチフォーム・スーツ。

しかし『制作者』の意図とは別に宇宙進出は一向に進まず、結果このスペックを持てあました機械は『兵器』へと変わり、しかしそ

れは各国の思惑から『スポーツ』にと落ち着いた——所謂、飛行パワードスーツだ。

しかしこの『IS』には致命的な欠陥があつて、そのことから俺にとつては何の意味もなさない。

「男は使えないんだよな、たしか」

そう、女にしか使えない。女以外には、この機械は反応しないのだ。

だから、いま目の前にあるのはマネキンと同じだ。何もしない、できない、ただの物体だ。

——そう思つて、触れた。

「!？」

キンツと金属質の音が頭に響く。

そしてすぐ、意識に直接流れ込んでくるおびただしい情報の数々。数秒前まで知りもしなかった『IS』の基本動作、操縦方法、性能、特性、現在の装備、可能な活動時間、行動範囲、センサーの精度、リーダーレベル、アーマー残量、出力限界、e t c……。

まるで長年熟知したもののよう、に、修練した技術のよう、に、すべてが理解、把握できる。

そして視覚野に接続されたセンサーが直接意識にパラメータを浮かび上がらせ、周囲状況が数値で知覚できる。

「な、なんだ……？」

動く。動くのだ。『IS』が。それも自分の手足のように。

肌の上に直接何かが広がっていく感触——スキンバリアー皮膜装甲展開、……完了。

突然体が軽くなる無重力感——スラスタ推進機正常作動、……確認。

右手に重みを感じると、装備が発行して形成されていく——近接ブレード、……展開。

世界の知覚精度が急激に高まる清涼感——ハイパーセンサー最適化、……終了。

それらすべてがわかる。知りもしないのに、習ってもいないのに、わかる。

そして『IS』から送られてくる情報で見る世界は、まるで——

「……………」

——えーと。

状況を再確認するぞ。今俺は高校一年、入学式当日。自己紹介の真っ最中。目の前に広がるのは三十一名の女子。後ろには、たぶん半泣きの山田先生。……ところで山田先生って下から読んでも上から読んでも『ヤマダマヤ』だな。うん、いい名前だ。覚えやすい。どうでもいい閑話休題終わり。

で、自己紹介を終わるに終われない俺。何せ目の前の女子は『も』と聞きたいなあ！』という期待に満ちた視線を俺に送り続けている。

おい、箒、幼なじみのよしみで助けてはくれまいか。——あ、また目そらしやがった。

薄情者め。感動の再開はどうした。そんなのないけど。

（いかん、マズイ。ここで黙ったままだと『暗いやつ』のレッテルを貼られてしまう）

俺は呼吸を一度止め、そして再度息を吸い、思い切って口にした。

「以上です」

がたたつ。思わずずっとこける女子が数名いた。どんだけ期待しているんだよ。無茶言っつな。

「あ、あのー……」

背後からかけられる声。涙声成分が二割増している。え？あれ？ダメでした？

パンツッ！いきなり頭を叩かれた。

「いつ——！？」

痛い、と言う無脊椎反射より、あることが頭によぎった。

この叩き方——威力といい、角度といい、速度といい、とある人物——よく知っているとある人物が同じような感じなのですが……。

「……………」

おそろおそろ振り向くと、黒のスーツにタイトスカート、すらりとした長身、よく鍛えられているがけして過肉厚ではないボディライン。組んだ腕。狼を思わせる鋭い吊り目。

「げえっ、関羽！？」

パンツッ！また叩かれた。ちなみにすっげえ痛い。その音があまりにも大きいから、見るよ女子が若干名引いている。

「誰が三国志の英雄か、馬鹿者」

トーン低めの声。俺はすでにドラの効果音が聞こえているんですが、はて。

——いやしかし、待て待て待て。なんで千冬姉がここにいるんだ？職業不詳で、月一、二回ほどしか家に帰ってこない俺の実姉は。

「あ、織斑先生。もう会議は終わられたんですか？」

「ああ、山田先生。クラスへの挨拶を押しつけてすまなかったな」

おお、俺は聞いたこともない優しい声だ。閑雲長はどこへ？赤兎馬に跨って去ったのか、劉備の元へ？

「い、いえつ。副担任ですから、これくらいはしないと……」

さっきの涙声はどこへやら、副担任の山田真耶先生は若干熱っぽいくらいの声と視線で担任の先生へと答えている。あ、はにかんだ。

「諸君、私が織斑千冬だ。君たち新人を一年間で使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ。私の言うことはよく聴き、よく理解しろ。出来ない者には出来るまで指導してやる。私の仕事は若干十五才を十六才までに鍛え抜くことだ。逆らってもいいが、私の言うことは聞け。いいな」

なんとという暴力宣言。間違はなくこれは俺の姉・織斑千冬。

だがしかし、教室には困惑のざわめきではなく、黄色い声援が響いた。

「キャー——！千冬様、本物の千冬様よ！」

「ずっとファンでした！」

「私、お姉様に憧れてこの学園に来たんです！北九州から！」

いや別に南北北海道でもいいけどさ。

「あの千冬様にご指導いただけるなんて嬉しいです！」

「私、お姉様のためなら死ねます！」

きゃいきゃいと騒ぐ女子たちを、千冬姉はかなりうつとうしそうな顔で見る。

「……毎年、よくもこれだけ馬鹿者が集まるものだ。感心させられる。それとも何か？私のクラスにだけ馬鹿者を集中させてるのか？」

これがポーズでなく、本当にうつとうしがっているのが千冬姉だ。千冬姉、人気は買えないんだぜ？もうちょっと優しくしようぜ。

と思った俺が甘かった。御坂神社の甘酒（というかあれはただの砂糖汁だ）くらい甘かった。五反田食堂のカボチャの煮物くらい甘かった（あれは改善を断固要求する）。天津甘栗——あれは特筆するくらい甘くもないか。そうか。

「きゃあああああつ！お姉様！もっと叱って！罵って！」

「でも時には優しくして！」

「そしてつけあがらないように躑をして〜！」

クラスメイトが元気で何よりですね。

と、例外としてその黄色い声援を聞きながらもうつとうしがっている奴が壁際に一人いたが。

しかし俺も自分のクラスの担任が千冬姉だったことに混乱と驚愕している——はずだったんだが、先刻の女子の黄色い声で逆に落ち

着いた。自分より強い感情が近くにあると人は相対的な意識が働いて落ち着くらしい。その通りだなと身をもって知った。

「で？挨拶も満足にできんのか、お前は」

辛辣。しんらつ——極めて手厳しいという意味。まさに俺にかけた実の姉の言葉はそれだった。

「いや、千冬姉、俺は——」

パンツ！本日三度目。知ってる、千冬姉。頭を叩くと脳細胞が五千個死ぬらしいよ。

「織斑先生と呼べ」

「……はい、織斑先生」

——と、このやりとりがまずかった。つまり、姉弟なのが教室中にバレた。

「え……？織斑くんって、あの千冬様の弟……？」

「それじゃあ、世界で唯一男で『IS』を使えるっていうのも、それが関係して……」

「ああっ、いいなあっ。代わってほしいなあっ」

最後のは放っておくとして、一応言っておこう。

俺は今、世界で唯一『IS』を使える男としてここ、公立IS学

園に
いる。

クラスメイトは全員女（後書き）

一応原作通りの内容です。

その中にな何か混じっていますが・・・（苦笑

幼なじみ

IS学園というのは、

ISの操縦者育成を目的とした教育機関であり、その運営および資金調達には原則として日本国が行う義務を負う。ただし、党機関で得られた技術などは協定参加国の共有財産として公開する義務があり、また黙秘、隠匿を行う権利は日本国にはない。また当期間内におけるいかなる問題にも日本国は公正に介入し、協定参加国全体が理解できる解決をすることを義務づける。また入学に際しては協定参加国の国籍を持つ者は無条件に門戸を開き、また日本国での生活を保障すること。——IS運用協定『IS操縦者育成機関について』の項より抜粋。

という学園なわけだ。

わかりやすく言うと、『てめー、日本人が作ったISのせいで世界は混乱してるから責任もって人材管理と育成のための学園作れや。その技術はよこせや。あ、運営資金は自分で出してね』ということ。ヤクザだな、某A国。

（で、なんで俺がその学園にいることになったか……というのは、IS学園の試験会場でテスト用ISを動かしたからなんだけど、そもそも何でそこに行ったかっていうのは……）

——藍越学園とIS学園って、似てるよな？つまり、そういうこと。

「……………」

ふと、まだ興奮冷めやらぬ教室内から、低温の視線を感じる。

見ると、さっきまで窓の外に視線を向けていた筈がこっちをそれとなく見ていた。

（うーん、なんだ？怒っているようにも見えるけど……俺なんかしたか？）

まあ、あとで聞いてみよう。

そんなことを思っていると、チャイムが鳴った。

「さあ、SHRは終わりだ。諸君らにはこれからISの基礎知識を半月で覚えてもらう。その後実習だが、基本動作は半月で体に染み込ませろ。いいか、いいなら返事をしろ。よくなくても返事をしろ、私の言葉には返事をしろ」

おお、なんとという鬼教官。目の前の姉は人の皮をかぶった悪魔だろうか。いや悪魔の方がまだ融通が利く。あいつら人間じゃないから。目の前の人間、なまじ人間性脳の限界を知っているからタチが悪い。

なにせこの織斑千冬、第一世代IS操縦者の元日本代表なのだ。しかも公式試合の戦歴は無敗。ところがある日突然、引退して姿を消す——ってというか、学園の教師してたのかよ……家族の俺にくらい言えよ……心配した俺が馬鹿だった。

「席に着け、馬鹿者」

はいはい、馬鹿ですよ。

「あー……」

参った。これはマズイ。ダメだ。ギブだ。

「……………」

一時間目のIS基礎理論授業が終わって今は休み時間。けれど、この教室内の異様な雰囲気はいかんともしがたい。

ちなみに、IS学園ではコマ限界までIS関連教育をするため、入学式当日から普通に授業がある。学校の案内？地図を見ろってさ。

（だがしかし、どうにかならないのかこれは……）

俺以外が全員女子。それはクラスだけではなく、学園全体がそうなのだ。

ちなみに『世界で唯一ISを使える男』というのは世界的にも二ユースになっただけで、当然学園関係者から在校生までみんな俺のことを知っている。

というわけで現在、廊下には他クラスの女子、二、三年の先輩らが詰めかけている。しかし女子だけの空間に馴染んでしまっているのか、なかなか俺に話しかけると言うことはしない。それはクラスの女子も同じで、『あなた話しかけなさいよ』という空気と『ちょ

つとまさか抜け駆けする気じゃないでしょうね』的な緊張感が満ちている。

ちなみにIS学園は世界でここ一カ所しかないのだが、ここに入学するための事前学習としてIS学習を授業に組み込んでいる学校は多い。

そしてその学校は百パーセント女子校。つまり、この学園の女子はほとんどが男子に免疫がないわけで、しかも世の男というのは非常に今辛い立場にある。

——ISが開発されてから今年で十年になるが、世界は激変した。

現行の戦闘兵器はISの前ではただの鉄クズに等しく、それ故に世界の軍事バランスは崩壊。しかも開発したのが日本人だったので日本は独占的にIS技術を保有していた。当然危機感を募らせた諸外国はIS運用協定——通称『アラスカ条約』によってISの情報開示と共有、研究のための超国家機関設立、軍事利用の禁止などが決められた。

そうすると、今度はISの操縦者がどれだけ揃っているかという点が、即その国の軍事力（正しくは有事の際の防衛力）へと繋がる。そして操縦者は当然女……となると、どの国も率先して女性優遇制度を施行した。

これによって『女』偉い』という構図はあつという間に浸透し、この十年で女尊男卑社会の完成というわけだ。

そこに突然対等の立場の『男』が現れると、当然まず第一に好奇心が湧くというわけで……。

（そして、今の状況なわけだが）

ちらつと隣の女子を見ると、それまで俺に向けていた視線を慌ててそらす。しかも『話しかけて！』という雰囲気はそのままに。

しかも、元日本代表で全国の子の憧れ、織斑千冬の子というプロフィールまでつくと、ますます話はややこしい。

（誰かこの状況を助けてくれ……）

ふと、旧友の五反田のことを思い出す。あいつはうらやましいとずっと言っていたが、どこがだ。今からでも遅くはない、代わってくれ。

「……ちょっといいか」

「え？」

突然、話しかけられた。女子同士の牽制に競り勝ったのだろうか？……いや、今教室内外に広がっているざわめきを考えると、どうも一人思い切って行動に出たようだ。

「……箒？」

「……………」

目の前にいたのは、六年ぶりの再会になる幼なじみだった。

篠ノ之箒。俺が昔通っていた剣術道場の子。髪型は今も昔も変わ

らずポニーテール。肩下まである黒い髪を結ったりボンが白色なのは、やっぱり神主の娘だからだろうか（篠ノ之道場は神社兼任）。

身長は平均的な女子のそれだが、長年剣道で培った体はどこか長身を思わせる。少し不機嫌そうに見える目は生まれつきと本人曰く……いや、俺が嫌われている可能性もゼロではないけど。実際、今し方名前で呼んだら睨まれたのは錯覚ではないはず。

どこかしら日本刀を思わせる印象、それが俺の思っていた篤像だったんだが、それは空白の六年で鋭さを増した気がする。

「廊下でいいか？」

教室では話しくいことなんだろうか。まあ、俺も今の状況から抜け出せるならなんでもいい。やはり持つべき者は幼なじみだ。薄情なんてとんでもない。言ったやつは即時謝るように。あ、俺か。

「早くしろ」

「お、おう」

すたすたと廊下に行ってしまう篤。そこに集まっていた女子がざあつと道を空ける。モーゼの海渡りかよ。

「へえ」

それでまあ廊下に出たんだが、途中窓際の後列二番目というベストポジション……えーと、自己紹介で両儀式と名乗っていたっけ？が何か呟いたように聞こえたが確認をする暇がなかった。おまけに俺と篤から四メートルほど離れた包囲網が完成しているだけだった。

しかも全員聞き耳を立てているのをひしひしとを感じる。教室内で喋っても同じだな、こりゃ。

「そういえば」

「何だ？」

ふと思い出したことがあって、俺から話を切り出した。というか
箒よ、廊下にまで移動させておいて自分から話しかけないっていう
のは新しすぎるだろ。

「去年、剣道の全国大会で優勝したってな。おめでとう」

「……………」

箒は俺の言葉を聞くなり、口をへの字にして顔を赤らめた。……
え？なんで怒ってんの？褒めたのに。

「なんでそんなこと知ってるんだ」

「なんでって、新聞で見たし……」

「な、なんで新聞なんか見てるんだっ」

何を言ってるんだ、箒は。意味がわからない。新聞くらい好きに
読ませろよ。あと、久しぶりに聞いたけど、口調がなんか男っぽい
というか、サムライって感じだな、相変わらず。

「あー、あと」

「な、何だ!？」

「……………」

「あ、いや……………」

さすがに自分の剣幕に気づいたのか、ばつが悪そうにする箒。しかし妙に興奮してるな。不思議なやつだ。

「久しぶり。六年ぶりだけど、箒ってすぐわかったぞ」

「え……………」

「ほら、髪型一緒だし」

そう言ってちょんちょんと俺が自分の顔を指すと、箒は急に長いポニーテールをいじりだした。

「よ、よくも覚えているものだな……………」

「いや、忘れないだろ、幼なじみのことくらい」

「……………」

ギロリ。また睨まれた。えー、なんで？

「いいの?式」

いつの間にか私の席の前の椅子を占領していた鮮花は不意にそう訊いてきた。

「……何が？」

「あの子のこともっとちゃんと監視しなくて。依頼とは関係ないとはいえ、やっぱりちよつとイリーガルよ？」

「鮮花は真面目だな」

「そつちが不真面目なだけよ。……もうっ橙子さんはまた私と式を組ませるような馬鹿な真似を……」

額に手を当てて今にも怒りで泣き出しそうな彼女は、それでもやはり真面目に依頼はこなすつもりでいるらしい。

「……やっぱり、トウコつて実は莫迦なんじゃないか……って思うよオレは」

組む、という問題に関しては私自身も同意見だったから相槌のようには私も打つ。

「ま、どうせオレはお前の“眼”担当なんだし、面倒なことは任せよ、鮮花」

「ホンツとてきとうなのねあなたは！でもそういつからには情報収集とかには付き合ってもらんだからね！」

ビシツと人差し指をこちらに向けて、鮮花は言う。

「ああ、わかってるよ」

なんせ前回と違って戦闘の匂いがプンプンする依頼だ。私にとってもまんざらではない。

「ふん、素直ね、式」

「そのためにこんな羽目にあってるんだから、さっさと片付けて帰りたいだけ、さ」

「それもそうか。まあ、私やアンタには興味がわくほどのものじゃないもんね、コレ」

ISの教本を指しながら鮮花は微妙に笑う。

お互い、いくつかは同意見なものが今回は多いらしい。

「そうだな……」

とりあえず、こんなことはちゃっちゃと終わらせることが第一だ、と私は慣れない制服を鬱陶しがりながらも、授業の準備を始めた。

キーンコーンカーンコーン。

おっと、時間切れだ。二時間目の開始を告げるチャイムで、それまで俺と箒を遠巻きに見ていた包囲網も自然と瓦解する。さながら

それは蜘蛛の子を散らすように。……うん、さすがはIS操縦者、行動が機敏だ。

「俺たちも戻そうぜ」

「わ、わかっている」

ぶいっと俺から顔をそらし、また来たときと同じようにすたすた歩き出す筈。どうやらこの幼なじみは俺を待つ気はないらしい。六年の歳月はこうも人を変えるのか。——いや、うそ。筈は昔からこんな感じだ。

初志貫徹、日進月歩、日々鍛錬、頑固一徹。篠ノ之箒といえば、そういう言葉が男子よりよく似合う女子。小学校の頃から変わっていない。

（個人的には臨機応変とか、その辺も少し入れてほしいところなんだが——）

「……………」

またギロリと睨まれた。いかん、俺の考えがバレたのかもしれない。筈は、こと自分の悪口に関しては昔から鋭い。——いや、悪口じゃないけど。あくまで俺の希望なだけであってだな。

パンツッ！

「とつとと席に着け、織斑」

「……………」ご指導ありがとうございます、織斑先生」

俺の脳細胞は午前中だけで二万個死んだ。

幼なじみ（後書き）

ところで、一夏の場合三万個で済んでない気がするの俺だけか？
^^；

授業の内容は宇宙語？

「——であるからして、ISの基本的な運用は現時点で国家の認証が必要であり、枠内を逸脱したIS運用をした場合は、刑法によって罰せられ——」

すらすらと教科書を読んでいく山田先生。しかし、俺は全くついて行けなかった。

「……………」

どっかりと積まれた教科書五冊。その一番上のものをばらりとめくるが、意味不明の単語の羅列にしか見えない。

（お、俺だけか？俺だけなのか？みんなわかるのか？このアクティブなんちゃらとか広域うんたらとか、どういう意味なんだ？というかこれ、まさか全部覚ええないといけないのか……？）

ちらつと隣の席の女子を見ると、山田先生の話に時々うなずいてはノートを取っている。

（ぐ……。しかしこのIS学園に入るやつって事前学習してるっていうのは本当だな……）

IS操縦者が国防力に直結する昨今、いわばこの学園はエリートを育てるための機関だ。そして入学試験でもものすごい倍率を勝ち上がって来た優等生でもある。

（エリートには興味がないが……うーん、このままではいかん。要

勉強だ)

かなりの劣等感に頭をたれながら、俺はついてきぱきノートに記入していく女子を注視してしまっていた。

「な、なに？」

案の定、視線に気づいた女子が驚いたような緊張しているようなその上なにか期待しているような、引きつった作り笑顔で聞いてきた。

「あ、いや。何でもないんだ。ゴメン」

「そ、そう」

俺の言葉を聞いて、ホツとしたようながっかりしたような表情を浮かべてノート記入に戻る女子。……うーん、俺は何か嫌われるようなことをしたんだろうか。

「織斑くん、何かわからないところがありますか？」

俺と隣の女子のやりとりに気づいた山田先生が、わざわざ訊いてきた。

「あ、えっと……」

開いている教科書にもう一度視線を落とす。——うん、全部わからん。

「わからないところがあつたら訊いてくださいね。なにせ私は先生

ですから」

えっへんとも言いたそうに、胸を張る山田先生。おお、もしかしたら頼れる先生なんだろうか、よし訊いてみよう。

「先生！」

「はい、織斑くん！」

やる気に満ちた返事。いいぞ、この人はさすが先生だ。

「ほとんど全部わかりません」

素直に自分の弱さを吐露。そうした方が多くの場合、受け入れてもらえるものだ。

「え……。ぜ、全部、ですか……？」

山田先生の顔が困り度百パーセントで引きつった。……あれ？頼れる先生はどこに？

「え、えっと……織斑くん以外で、今の段階でわからないっていう人はどれくらいいますか？」

拳手を促す山田先生。

シーン……。

あれ、おかしいな。誰も手を挙げない。最初でつまずいたまま進むと、絶対あとから後悔するぞ。いいのか、それでいいのか、みんな

な！

「……織斑、お前、入学前の参考書読んでないんだろ？」

空を見ながら、予想外なことに両儀式がそんなことを訊いてきた。

というか、初対面で女子に呼び捨て＋お前呼ばわりされるとは…

…。

「……式。あなたもてきとうに眺めてただけでしょ？」

すると、その隣に座っていた…えーと、黒桐鮮花だったかな、たしか。彼女が諫めるように突っ込んだ。

「鮮花。オレはちゃんとアレに書いてあることはすべて暗記したぞ。何も問題はない」

おまけに一人称は『オレ』だった。なんというか、箒よりも勇ましいというか、男っぽいやつだな。だが、それより――

「あ、あんなに分厚い本の中身全部暗記したのかよっ！？」

気づけばいつい突っ込んでいた。いやまあ、俺も人のこと言えないな。最初からため口になってるじゃないか。

「…？当然だろ、そんなこと。驚くような出来事なんかじゃない」

さも当然のことのように認識していらっしやるようだった。なんといいますが、ハイ、とても耳が痛いです。

「……織斑、読んだのか？」

教室の端で控えていた千冬姉が訊いてくる。よし、俺は素直に答えよう。

「古い電話帳と間違えて捨てました」

パンツッ！

「必読と書いてあっただろうが馬鹿者」

また俺の中の脳細胞俺が五千人死んだ。ちくしょう、葬儀屋が儲かるわけだ。

「後で再発行してやるから一週間以内に覚えろ。いいな」

「い、いや、一週間であの分厚さはちょっと……」

「やれと言っている」

「……はい。やります」

ギロツと俺を睨む目は鬼軍曹とかそういうものを超えていた。悪魔だ、悪魔の皮をかぶった人だ。同じ人間である分タチが悪い。どうすれば人が苦しむか熟知してるもんな。

「ISはその機動性、攻撃力、制圧性と過去の兵器を遥かに凌ぐ。そういった『兵器』を深く知らずに扱えば必ず事故が起こる。そうしないための基礎知識と訓練だ。理解ができなくても覚えろ。そして守れ。規則とはそういうものだ」

はい、正論です。

でも一つだけ言わせてもらつと、俺は希望してここにいるわけじゃない。

ある日黒服の男たちがやってきて、『君を保護する』とか言つてIS学園入学書を置いていったんだ。意味がわからない。保護するつていうのはあれか、女の園にひとり男を放り込むことなのか？俺は今のこの状況から保護してほしい。主に千冬姉の腕力から。

「……貴様、『自分は望んでここにいるわけではない』と思つているな？」

ギクリ。なんでバレたんだ。

「バレた理由つて、そりゃあお前顔に出てるぞ」

——マジ？

いつの間にかこちらを両儀式は見つめていた。先が見えないどこまでも続く綺麗な黒い瞳に、つい魅せられる。それと同時に彼女から放たれた言葉に内心焦りを覚えた。

「望む望まざるにかかわらず、人は集団の中で生きなくてはならない。それすら放棄するなら、まず人であることを辞めることだな」

相変わらず辛辣だ。つまり、現実と直面しろって言ってるんだよな。千冬姉、昔から超現実主義だもんな。理由はわかるけど。

「……………」

ふう。——やるしかないか。

せめて、千冬姉に恥をかかせないくらいにはやれないと、職場で肩身の狭い思いをさせられるだろうし。

俺は家族を見捨てない。顔も知らない両親とは違う。

「え、えつと、織斑くん。わからないところは授業が終わってから放課後教えてあげますから、がんばって？ね？ねっ？」

山田先生が両手をぐつと握って詰め寄ってくる。俺より身長が低いから、必然的に上目遣いになっていた。

「はい。それじゃあ、また放課後によろしくお願いします」

それだけ言って、席に着く。千冬姉も教室の端に戻っていった。なんとなく、両儀式のいるであろう席を見ると、彼女はまた空を眺めていた。

「ほ、放課後……放課後にふたりきりの教師と生徒……。あっ！だ、ダメですよ、織斑くん。先生、強引にされると弱いんですから……それに私、男の人は初めてで……」

いきなり頬を赤らめてそんなことを言い出している。山田先生、大丈夫なんだろうか。IS操縦者って本当に男に免疫ないんだな。というか周囲の視線が痛い。視線に物理的な干渉力があつたら俺は蜂の巣だ。

「でも、織斑先生の弟さんだったら……」

「あー、んんっ！山田先生、授業の続きを」

「は、はいっ！」

一向に妄想から帰ってこない山田先生を、千冬姉の咳払いが呼び戻す。

「うー、いたたた……」

（……大丈夫か？この先生……）

果てしなく前途が多難な気がする俺だった。

授業の内容は宇宙語？（後書き）

今日は一心連続投稿。

苗字は嫌いなんです

「ちょっと、よろしくて？」

「へ？」

二時間目の休み時間、またしても針のむしろを味わうかと思っていた俺は、いきなり声をかけられて素っ頓狂な声を出した。

話しかけてきた相手は、地毛の金髪が鮮やかな女子だった。白人特有の透き通ったブルーの瞳が、ややつり上がった状態で俺を見ている。

わずかにロールがかった髪はいかにも高貴なオーラを出していて、その女子の雰囲気も『いかにも』今の女子という感じだった。

今の世の中、ISのせいで女性はかなり優遇されている。優遇どころか、もはやいきすぎて女々しい構図にまできている。そうになると男の立場は完全に奴隷、労働力だ。今じゃ街中ですれ違っただけの女にパシリをやらされる男の姿なんて珍しくもない。

つまりそういう、いかにも現代の女子が目の前にいた。腰に当たった手が様になっているあたり、実際にいいところの身分なのかもしれない。

ちなみにこのIS学園では無条件でも多国籍の生徒を受け入れなくてはいけないという義務のせいで、外国人の女子なんて珍しくもない。むしろ、クラスの女子の半分がかるうじて日本人というだけだ。

「訊いてます？お返事は？」

「あ、ああ。訊いてるけど……どういう用件だ？」

俺がそう答えると、目の前の女子はかなりわざとらしく声を上げた。

「まあ！なんですの、そのお返事。私に話しかけられるだけでも光栄なので、それ相応の態度というものがあるんじゃないかしら？」

「……………」

正直、この手合いは苦手だ。

ISを使える。それが国家の軍事力になる。だからIS操縦者は偉い。そしてIS操縦者は原則女しかない。

だからといって、その力を振りかざすのは違っだろう。力が粗暴なら、そんなものはただの暴力だ。

「悪いな。俺、君が誰か知らないし」

実際、知らない。なんか自己紹介で色々言っていた気がするが、正直覚えていない。あの、両儀式という女と千冬姉が担任だったことのせいで他の女子たちの影が薄らいでしまっていたのだ。

しかしどうもその答えは、目の前の女子（いい加減名前を教えてくださいと助かる）にとってはかなり気に入らないものだったらしい。

吊り目を細めて、いかにも男を見下した口調で続ける。

「わたくしを知らない？このセシリア・オルコットを？イギリスの代表候補制にして、入試主席のこのわたくしを！？」

ああ、名前セシリアっていうのか。ふーん。

「あ、質問いいか？」

「ふん。下々のものの要求に応えるのも貴族の務めですわ。よろしくてよ」

「代表候補生って、何？」

がたたつ。聞き耳を立てていたクラスの女子数名がずっこけた。

「あ、あ、あ……」

「『あ』？」

「あなたっ、本気でおっしゃってますの！？」

すごい剣幕だった。マンガだったら血管マークが三つはついてそっうだな。

「おう。知らん」

知らないことは素直に言おう。見栄は身を滅ぼす。

「……………」

「莫迦に常識が通じると思ってたのか？」

そいつはアレだぞ、五教科とか普通の勉強ならそこそこできるが、興味がないことについては滅法弱いタイプの人間だ」

いつの間にかに、両儀式が会話を聞いていたらしく、そんなことを言ってきやがった。というか、今度は馬鹿＋そいつ呼ばわりかよ。なんだか人間としての基本的人権を侵されてないか？俺。

おまけに両儀式の隣には鮮花がいて、額に手を当てている。二人は仲がいいのだろうか。さっきも授業中彼女は、両儀式に突っ込んでいたな。

セシリアは両儀式（何故だか未だフルネーム）の言葉に冷静になったのか、頭が痛そうにこめかみを人差し指で押さえながらぶつぶつ言い出した。

「信じられない。信じられせんわ。極東の島国というのは、こうまで未開の地なのかしら。常識ですわよ、常識。テレビがないのかしら……」

失礼な、テレビくらいあるぞ。見ないけど。

「で、代表候補生って？」

「国家代表IS操縦者の、その候補生として選出されるエリートのことよ」

鮮花が答えてくれた。どうやら彼女は結構説明好きらしい。

「……あなた、単語から想像したらわかるでしょう」

「そついわれればそうだ」

簡単なことほど見落としやすいって本当なんだな。

「……行こう、鮮花。コイツの話聞いていると莫迦がうつりそうな気分だ」

言っが早いか、両儀式はすたすたと廊下へと出て行った。

「お、おいっ！両儀、馬鹿とはなんだよ！馬鹿とはっ！」

「言葉通りの意味だ。そんなことも説明してやらなきゃいけないのか？」

途中で立ち止まり、言葉だけ返したくれた。だが、言葉はまだ優しい方だっただけに、彼女の睨み具合がとても恐ろしく感じる。

再び彼女はその行為さえわぜらわしくなったのか、髪をかきあげて歩き出した。

「ちょっと、式！待ちなさいよ」

その後を鮮花が追っついていき、すぐに二人の背中は見えなくなった。

後で小さく鮮花が耳打ちしてくれたことによると、彼女は名字で呼ばれるのがあまり好きではない、ということだった。

ちなみにその後のセシリアとの会話は自分と同じクラスになれた

だけでもラッキーだとか、自分は優しいから俺みたいのとも仲良くしてやるだとか、すごいお嬢様発言の数々だった。……正直言おう、ついていけない！

キンコンカンコン。

そんな俺の心情を察してくれたのか、授業開始のチャイムが教室に鳴り響いた。今の俺には福音に聞こえる。

「っ……！またあとで来ますわ！逃げないことね！よくつて！？」

よくない。でもそう言ったら怒るだろうから、とりあえずつなずいておく。

「それではこの時間は実戦で使用する各種装備の特性について説明する」

一、二時間目と違って、山田先生ではなく千冬姉が教壇に立っている。よっぽど大事なことなのか、山田先生までノートを手に持っていた。

「ああ、その前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないといけないな」

ふと、思い出したように千冬姉が言う。うん？クラス対抗戦？代表者？

「クラス代表者とはそのままの意味だ。対抗戦だけではなく、生徒会の開く会議や委員会への出席……まあ、クラス長だな。ちなみにクラス対抗戦は、入学時点で各クラスの実力推移を測るものだ。今

の時点で大した差はないが、競争は向上心を生む。一度決まると一年間変更はないからそのつもりで」

ざわざわと教室が色めき立つ。俺は例によって事前知識がゼロなので、まったく意味がわからない。まあ、クラス長を決めるって言うてたから、つまりは室長だ。とりあえずそういうことだと思って納得しておこう。たぶん面倒な仕事が多いんだろうな。なるやつはご苦労様だ。

「はいっ。織斑くんを推薦します！」

——ん？織斑ってこのクラスにもうひとりいるのか？それは奇遇だ。

「私もそれが良いと思います！」

おう。俺も、俺以外がなるのなら誰でもいいぜ。

「……そこ、なに愉快に現実逃避してるんだ？おまえだぞ？織斑つてのは」

式（やつと下の名前だけになった）が呆れを隠さずに言った。

「お、俺！？」

つい立ち上がってしまう。そして視線の一斉射撃。振り向かなくてもわかる、これは『彼ならきつとなんとかしてくれる』という無責任かつ勝手な期待を込めた眼差しだ。

「織斑。席に着け、邪魔だ。さて、他にいないのか？いないなら無

投票当選だぞ」

「ちよつ、ちよつと待った！俺はそんなのやらな——」

「自薦他薦は問わないと言った。他薦されたものに拒否権などない。選ばれた以上は覚悟しろ」

「うつ、そ、それなら俺は両儀式を推薦するぞっ——！」

【は…？】

クラスメイト全員がいきなりのセリフに首をかしげた。そしてみんなの視線は窓際へと集中していく。

「……………」

俺もみんなに倣い視線を向けると……。……すげえ、世にはこんなに無言で怯えさせる方法があるのか。と思うぐらいご立腹な式さんがいらつしゃった。小さく震えた唇が『殺す』といっているように見えたのは、俺だけか。

「え、えーと。じよ、冗談です。両儀さん」

ピキンッ！

何かが切れる音がした。そして視線の先には溜息をつく鮮花。

ああ、名字……。か。イカン、つい見落としてた。

「……ふん、オレは面倒なことは嫌いだ。覚えとけ、織斑」

どうやらこの場は見逃してくれるようだ。よかった…あと少しで身体の半分ぐらいの水を汗として消費するところだったぞ……。

あれ、そういえば名字で呼ばれるのが嫌な割には自身は人を名字で呼ぶんだな。不思議なやつだ。

「では……候補者は織斑一夏……他にはいないか？」

確認するように千冬姉が訊く。うう…誰か名乗り上げてくれ！

「待ってください！納得できませんわ！」

パンつと机を叩いて立ち上がったのは、あのセシリアなんとかさんだ。おお、人望がここで役に立ったぞ。人とは仲良くしておくものだな。

「そのような選出は認められません！大体、両儀さんならともかく男がクラス代表だなんていい恥さらしですわ！わたくしに、このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか！？」

そうだそうだ、もっと言ってやれ！……ん？

「実力から行けばわたくしがクラス代表になるのは必然。それを、物珍しいからという理由で極東の猿にされては困ります！わたくしはこのような島国までIS技術の修練に来ているのであって、サーカスをする気は毛頭ございませんわ！」

あれ？俺、人じゃなくなってる。なんで？……って、それなら式

だって極東の猿扱いじゃないか。彼女だって名前の通り日本人だぞ。ていうか、イギリスも島国だろ。そんな言うほど日本と差なんかないだろ。

「いいですか！？クラス代表は実力トップになるべき、そしてそれはわたくしですわ！」

興奮冷めやらぬ——というか、ますますエンジンが暖まってきたセシリアは怒涛の剣幕で言葉を荒らげる。代表にはなりたくないが、こうまで言われるとちよつと癪だ。

「大体、文化としても更新的な国で暮らさなくてはいけないこと自体、わたくしにとっては耐え難い苦痛で——」

カチン。

「よく言うよ。おまえ、イギリスだって世界一まずい料理で有名な国じゃないか」

何か思うところがあつたのか、口を開こうとした瞬間、式が代わりに代弁してくれた。さすが、俺と同じ日本人だぜ。

「なっ……！？」

プツッ。

セシリアの何かが切れた様な音がする。

おそろおそろ後ろを向くと、怒髪天をつくと言わんばかりのセシリアが顔を真っ赤にして怒りを示していた。うわあ…式が先に言わ

なきや俺があれを真っ向から受けて立っていたのか……。

「あつ、あつ、あなたねえ！わたくしの祖国を侮辱しますの！？」

あー、もう、こうなったら仕方ない。覆水盆に返らず。転がり出した石は止まらない。

だが、式はそんな剣幕を涼しげな顔で受けきって見せていた。いや、それどころかあいつ少し笑ってないか。

「侮辱なんかしていない。ただの事実を述べたまでさ。日本人に対してあれこれ言ったのはそっちだぜ？ならこっちがそっちのことにについて言って何が悪い」

すごい正論だった。俺だったらああなったセシリアにこんなに冷静に返せないぜ、まったく。

「式、こういう類の人間にそんな常識で返しちゃだめよ。どうせご自身のお国自慢しかできないんですから」

澄ました声で、鮮花までそんなことを言う。この人って意外と口も達者なタイプでいらっしやるのか……。

「決闘ですわ！」

パンツと机を叩くセシリア。どう見ても負け犬の遠吠えだった。

「……オレに決闘の申し込み？」

対する式は面白いものでも見ているかのような笑みを浮かべてい

た。……あれ、よく見ると彼女の手になにか銀色に輝くものが……。

「ちょっと式！それは駄目よ」

「……決闘を申し込んできたのはあっちだぜ、鮮花」

「それでも、です！何なら兄さんにちくりますよ」

「なっ……！なんでここで幹也が出てくるんだよ」

いきなり鮮花から放たれた単語で、彼女の戦意は喪失していた。
あれ、一体どうしたっていうんだろっ……。

「…式」

「…わかったよ、ちえっ。命拾いしたなオルコット」

式は銀色の何かをしまうと席に着く。どうやらもう何もする気がないらしい。

「……ところで鮮花。おまえさっきのセリフ言っただけで自分で悲しくならなかったのか…？」

「……少しほっというて頂戴」

そんな二人の会話が聞こえたのはまた別の話だ。

「き、棄権しますの…？それなら織斑一夏。あなたが決闘しなさい！」

…え？ここで俺に振るの？ま、いいか。

「…四の五の言うよりわかりやすいな」

「言っておきますけど、わざと負けたらわたくしの小間使い——いえ、奴隷にしますわよ」

「侮るなよ。真剣勝負で手を抜くほど腐っちゃいない」

「そう？何にせよちょうどいいですね。イギリス代表候補生のこのわたくし、セシリア・オルコットの實力を示すまたとない機会ですわね！」

流れとはいえ勝負をすることになってしまった。しかし、男が本気で女子と力比べをするわけにもいかないし、どうしたもんかね。

「ちょっと待った。……それ、ISでの勝負よね？」

と、いきなり鮮花が会話に割って入った。この勝負を止めてくれるのだろうか。

「そうですわよ。それ以外に何があるっていうんですの」

「なんだ、肉弾戦じゃないのか」

何やら残念そうに呟く式。……彼女さっきまでの決闘で肉弾戦をするつもりでいたのか。どうりで何やら銀色のものが…あ、いや深くは考えないでおこう。

「それなら、式。あなたが撒いた種だし、男と女の勝負ってのはフ

エアじゃないからあなたが相手をすれば？」

「……別にいいけど。いつとくがオレは勝負事で負けるつもりはないぞ」

「それじゃあ、オルコットさんも織斑くんもそれで異存はない？」

「え、ええ……」

「俺はどちらでもいいぜ」

嘘だ。出来る限り女子に対して本気の勝負なんかしたくはない。

「さて、話はまとまったな。それでは勝負は一週間後の月曜。放課後、第三アリーナで行う。両儀とオルコットはそれぞれ用意をしておくように。この戦いで勝った方がクラス代表を決める権利を持つ。それでは授業を始める」

ぱんつと手を打って千冬姉が話を締める。これはどっちが勝っても嫌な予感がするのは俺だけか？

でも心情的には式に勝ってもらいたい。同じ日本人だしな。そうだが、俺も一緒に訓練するとして、うう、なんだか途中で押し付け合いをしたような感じではあるしな。

（よし、真面目に授業を聞こう）

俺は早速机の上の教科書を開いた。

苗字は嫌いなんです（後書き）

うゝんやっぱりまだ一夏はよくわからない・・・言い回し勉強せね
ば^ ^ ;

騒ぎの中心点

「——というわけなんだ」

「……………」

トウコの台詞に私と鮮花は暫くの間、何も考えることができなかった。互いに今ならおかしい表情をしていることだろう。

「橙子さん、それは何の冗談でしょう？」

先に口を開いたのは鮮花だ。正直私もこればかりは鮮花に同意見だ。こんなの莫迦げている。

「社長、さすがに式と鮮花をIS学園に入れるなんてそんなの無茶です。鮮花は私立の礼園に通っていますし、式だってまだ学生なんですよ。大体二人とも今度高校三年生じゃないですか」

お、さすが幹也だ。こういう時は一番の常識人こそが正論を言うのに長けているな。

「そりゃあ、私だってこんな出鱈目なこととはしたくはないさ。私がこの年でIS学園に行けるといふのなら既にそうしている」

「ああ、それは無理だな」

「……………」そこで即答されるのもなかなか癪だがね。今回の依頼は亡^{ファ}ントム・タスク
国企業の裏を探ることだ。聞いたことはあるかい？」

「……たしか、裏の世界で暗躍する秘密結社ですね。目的も規模も全てが謎に包まれているっていう」

ふむ。相変わらずだがコイツはなんでも知ってるな。どうやってそういったことを調べているというのだろう。トウコの言うとおり幹也は探偵に向いているのかもしれない。

「その通り、亡国企業には近々不穏な臭いがする。彼らの通った道には何らかの犠牲がつく、といったぐらにな。そしてそれは魔術教会さえも脅かしている。まあ、こつちのことは私には関係ないんだがね。だが犠牲っていうのが厄介でね、どうやら人間の皮を被った化け物の仕業らしい」

眼鏡を取っているトウコは魔術師として不適に微笑む。どうやら今回私をIS学園に転入させるのは、戦闘能力の補充といったところだろう。確かに化け物の相手としては鮮花は不十分だ。……鮮花がそれを納得するかはまた別の話ではあるが。

「はあ、つまり私に妖精の時と同じく情報を探れと言うわけですか」

案の定、鮮花はあまり今回は乗り気ではないようだ。特に私と組む、という問題が彼女をご機嫌斜めに行っているのだろう。

「これは鮮花。お前に対する試練だ」

「試練、ですか？」

「鮮花、おまえは発火することしかできない。とはいえ、一代で魔術を扱えるおまえは優秀といって差支えがないだろう。だがそれだけでは魔術師とは言えない。何が足りないかわかるか？」

「経験でしょうか」

鮮花の言葉にトウコは頷いた。

「……はあ、わかりました。弟子は師匠の言うことを聞くものです。少々不服ですが、その依頼受けます。ですがあそこの競争率はわかっていらっしゃるんですか？ 橙子さん」

これが最後の抵抗だ。とでも言わんがばかりに鮮花は問い質す。そういえばどのくらいだというのだろう。私と鮮花はそっちの面は正直からつきしといていいぞ。

「ああ、それなら問題ない。もう既に依頼主によりおまえたちの入学は決定している」

「……トウコ（橙子さん）」

つまりは既に決まったことだったというのか。毎度ながら一番の敵はトウコなんじゃないだろうか。高笑いをするトウコの隣では幹也がため息をついている。

「……ああ、それと。二人ともこれを渡しておく」

目の前に分厚い本が置かれる。タイトルはインフィニット・ストラトス……そのまんまだな。

「これを入学までに目を通しとおくように、とのことだ」

「うっ……これ全部ですか？」

「ああ、全部だ」

鮮花が大きいため息をつく。もうどうにでもなれ、と自暴自棄にすらなっている。

「近いうちに私もIS学園には潜入する。おまえたちは先に行つて場の空気に慣れておくがいい。特に式、女子校の経験がないおまえには少し大変かもしれん」

「……関係ないよ。というか、トウコ。潜入するってどういうことだ」

「そうですよ橙子さん、どういふことですか？」

記憶が正しければトウコが表立って動けないから私たちが潜入する、という内容ではなかっただろうか。

「私は先生という立場だよ。ほら、私は言語療法士なんぞな」

「…あれってマジだったのか……」

「それなら式と鮮花が出張する必要はあるんですか？」

「ああ、先生サイドではつかめない内容も多いからな。そういった場面で二人に動いてもらいたい」

そういつとトウコは眼鏡をかけなおした。話は終わりだという合図だろう。私はトウコの机にある二冊のうち一冊を取ると皮ジャンパーを羽織る。そのまま伽藍の堂を後にした。途中で幹也の声が聞

こえた気もしたが振り返ることはなかった。

「……はあ……」

ベッドの上で寝返りをした。現在はいつもの和服姿だ。私と鮮花は二人部屋で、今は鮮花が風呂に入っている。ちなみに私は先に入った。

「って、本気で殺す気か！今のかわさなかったら死んでるぞ！」

と、いきなり近くの部屋からそんな叫び声が聞こえた。

「……この声、織斑か」

男はこの学園にひとりしかいない。つまりはそれが答えだった。

「暇だし、見物に行ってみるか……」

着物の上に何も羽織らずに私は部屋を出た。叫び声の起源は簡単に見つかった。女子の山の中心点を探ればたやすいことだ。

「……箒、箒さん、部屋に入れてください。すぐに。まずいことになるので。というか謝るので。頼みます。頼む。この通り」

何やら織斑はドアの前で合掌していた。かなり無様な姿だ。

「おまえ、ドアに向かって願い事をする趣味でもあるのか？」

なんとなく……。気づけば声をかけていた。別にこんな奴に興味なんかないのに。

「あ、式……。いや、これは別にそういう意味じゃないぞ」

「……？じゃあなんなんだよ」

「え、いやこれは、その……」

言い淀みながら織斑はこちらを振り向く。すると何故だがそのまま固まった。

「おい、なに無言でこつちを見てんだよ」

本当変わったやつだな、織斑一夏って奴は。

織斑は意識を取り戻したように、びくつと一度震えると微妙にそっぽを向いた。一体なんだというのだ。

「い、いや……式って和服似合うなと思って」

「なんだ、そんなことか。どうでもいいことで反応するんだな、おまえ」

気づけば周りの子たちも私の和服姿にあれこれ言っているようだ。まあ、こういうのには慣れている。だから私は何も気にしない。

「……それでドアの前でなに無様なことやってるんだ？」

あまり興味はないが、一応聞いてみた。すると目に見えて彼は冷や汗をかき始めた。

その時だ。ガチャ、という音がしてドアが開いた。目の前には剣道着姿の篠ノ之が無言で織斑を睨めつけていた。いったい何をやったというのだろう、こいつは。

「……入れ」

時間にして数分の時を経て短く彼女の口から言葉が紡がれる。

「お、おう……じゃあな、式」

そのまま微妙に気まずそうに織斑は部屋に入ってしまった。もしかして、あいつらは同部屋なのだろうか。

とりあえずまた何もすることがなくなった。部屋に戻って寝るとしよう。

人の山をするりと抜け、私は寮の部屋へと戻った。そのままポフッとベッドに倒れこむ。まだ、鮮花は風呂に入ったままだ。

「女子ってホント風呂が長いんだな……」

私の意識はどんどん睡魔によって薄れていった。

騒ぎの中心点（後書き）

そつえば箒で剣道何段なんでしょう？優勝経験があるほどってことは相当ですよね・・・

スイッチのON/OFF

ほぼ授業の内容は本に載っていたことについての復習みたいな感じだった。正直暇だ。どれぐらい暇かといえばその時間があれば幹也を23回は弄ることが出来ただろうと思うぐらい暇だ。まあ、いいけど。

暇なのは鮮花も同じらしく、さつきから見つからない程度に髪の手入ればかりしている。

ああ、他のクラスの連中は真面目に授業に聞き入っている。興味があるかないかの差で、人は変わるのだという良い例えみたいなものだ。

私は授業と休み時間の差もないぐらいに空を見続けていた。時折聞こえてくる女子の黄色い声は正直鬱陶しい。

と、女子が騒がしいから今は休み時間なんだろう。なんて気楽に思っていると、織斑先生が私の机のところまでつかつかと歩いてきた。何か用事でもあるのだろうか。

「何か用でもあるんですか、織斑先生」

「大した用ではないがな、お前のISについてだ」

ISについて……か。おそらく今度行われるオルコットとの試合関連なんだろうが……正直どうでもいい。勝とうが負けようが私にデメリットなどないのだ。科学で染められた戦闘に私は興味がない。

——そう、どっちかといったら私が興味があるのは魔的な何かの方だ。それは対極のように交わることを知らない力だ。

だがまあ、建前上ここは相槌をうつとく方が無難だ、と判断するとその後の私の行動は自分でも驚くぐらい早かった。

「打鉄ですか？たしかあれが量産機では主流だと聞きましたが」

「いや、おまえと黒桐、織斑には専用機が用意されることになっている。蒼崎先生がどうやってかは知らないが二人に専用機を準備したそうだ。織斑の方は学園で用意するとの話だな。とりあえずまだ調整が終わっていないらしく、しばらくかかるとのことだ」

……………今、蒼崎先生とか言わなかったか、この先生。

隣では鮮花がまた頭を抱えている。苦勞が絶えないな、ほんと。

クラスメイトの方は織斑先生の言葉に口々にうらやましいと叫んでいる。たしか現在世界中にあるISは467機と聞いたが、その中でも一クラスに1機、つまりオルコットの専用機一つだけでもすごいことだとは容易に理解できる。だっていうのに一気に4機にまで増えるというのだ、確かにこれはとんでもないことだろう。

——それにしても、トウコの奴いったいどんなコネを使っていたというんだ……………。

それこそが一番の謎である。あの封印指定の魔術師はいったい何をしたというのだろう。先生と呼ばれているからには既にこの学園に潜入しているのだろうが、その割には見当たらない。

「あ、あの……………蒼崎先生って……………？」

鮮花が耐えかねて質問した。すると不思議そうな顔をする織斑先

生。何がそんなに不思議だというのだ。

「ん？どうした。おまえたちは新任の保険の先生である蒼崎先生とは知人なのだろう？結構な問題児かもしれませんがよろしくお願いします、と言われたが」

「……………」

眼鏡をかけて決して目は笑っていない作り笑顔で彼女に言う姿が鮮明に想像できる。ああ、そりゃあもう目の前にいたら殴りたくなくなるぐらいに鮮明だぞ、これ。

「はあい鮮花さん、式さん」

噂をすればなんとやら。教科書を手に持った眼鏡姿の女性。トウコがこちらにニツコリ笑顔で向かってきていた。

……よし、殴ろう。

「ああ、蒼崎先生。ちょうど今ISについて伝えたところです」

「そりゃあどうもありがとうございます。……ん？どうしちゃったの式さん。そんな怖い顔しちゃって」

絶対に自覚があるだろうに、それを顔に出さずにトウコはいう。ああ、本当に殴っていいよな、私。

軽く鮮花の方を流し見してみるとぐったりとしたまま『もう勝手にして』とばかりに肩を落としている。重症だな、あれは。

キンコーンカーンコーン

だがその前にタイミング良く、否、悪くチャイムが鳴る。

織斑先生とトウコは教壇へと向かい、私は握っていた拳を致し方なく開いた。

「はいはい、それでは授業を始めますよ。」
と、その前に……はじめまして皆さん、私の名前は蒼崎橙子。今回保健室の先生兼あなた方の精神面でのケアを担当させていただきます。気軽に話しかけてくださいね。」

眼鏡をかけたトウコは本当にがらんと人が変わる。本人曰くスイッチを切り替えているだけ、とのことだが他人から見れば二重人格の類だろう。

「授業では主にあなたたちの精神面を主軸に置いた戦闘法がメインとなります。ん、君、今関係ないと思った？」

視線の先はトウコの目の前……つまり、織斑だった。

「そういうわけではないんですが、やっぱり戦闘と言えば実技による訓練が一番かな……とか」

そんな言葉眼鏡を取ったトウコに言ってみろ、間違いなく睨めつけられるぜ。だが幸いにして授業中の彼女は眼鏡を取るつもりなんて全くないだろう。だからある意味安全だ。

もちろん、それはクラスメイトだけの話であり、本性を知っている私と鮮花にとっては逆にやりづらい。特に鮮花にとってはあれで

も師匠なのだ。ちょっとばかり笑えない状態なのかもしれない。

「ふむふむ。たしかに、実技による訓練というのも大切よ。うん、それは事実。だけどね織斑くん。どんなに実技をしてもパターンが同じなら意味がないの。精神面で考えて、相手の行動を読んで、自分の動きをパターン化しないように工夫をして。そうやって能力を高めるのも必要なの。……そうね、織斑くんは殴り合いの喧嘩とかやったことある？」

「はあ、男なら喧嘩ぐらいやったことないやつがいないと思います
が」

「そうよねー男の子は口より手が早いわよね。尤もそれは昔の話、ではるんだろうけど。君は男の子の中でも魅力があるようで関心関心。」

「じゃあわかるわよね。喧嘩はただの殴り合いではなく、頭脳戦だ
ってことは」

「……理屈では」

へえ、トウコにしては単純な内容だ。最初の授業だからあくまで言葉を砕いて、だということだろうか。まあ、こんなの寄り道のつまらない話ではある。

だが以外にもクラスの連中は興味津々に聞き入っていた。普通、女つてのはそういった類の話は嫌いな人種だと思っていたんだが。

「そう、理屈でも理解することが大事なの。そしてそれを割り切る。認めた上で精神面を鍛え上げていく。それが私の授業。」

例えば目の前に凶暴な野犬がいるとする。逃げようにも近くには怪

我して動けない人がいる。その場合君はどうする？」

織斑の隣に座る女子をトウコは指差した。すると彼女はしばらくの沈黙の後、

「何か武器になるようなものを見つけて、それで応戦します」

「では、その武器がなければ？」

「そ、そのときは……」

負傷者を置いて逃げる、なんて言葉が喉元までやってきているのに、それが良心により言えない。中途半端な優しさによる戸惑いに彼女は苦しんでいるようだ。

「蒼崎先生。その質問はズルいですよ」

見兼ねたのか鮮花が救いの手を差し伸べていた。

「あーごめんごめん。私の周りには物騒な子が多くてね。ちょっと最初にしては野蛮な例だったかな？ちなみに黒桐さんはどうする？」

「そんなの決まっています。私は私に可能なことをやるだけですから」

サラリと言う。彼女は決して自身の意志に嘘はつかない。相手が嫌いな相手だろうと本当に思った感想ならば、嫌いな相手を褒めることだっけしてしまうぐらいの清々しさを持っているのだ。

だから私は鮮花が好きだ。こういった類の人間は一緒にいて苦痛

にならない。

「そうね。あなたの場合それが強さへと繋がっていく。自分ができることを把握して、柔軟に対応できるのがあなた。ちよつと熱くなりすぎて空回りするところもあるけどね」

鮮花の顔が少し赤くなる。どうやら墓穴を掘ったことに少しばかり後悔もしているらしい。

「まあ、もちろん筋力に自信があれば負傷者を背負って逃げる。なんて選択肢もあるだろうし、腕前があれば力で野犬を追い払うこともできるでしょう。」

それを判断するのはあなたたちであつて、他人ではない。それはどのような戦場においても同じです。ただ戦うだけではなく、そういった部分での成長も重要。

では、戦う時において一番重要なのは何でしょう」

視線がオルコットの方へと向く、トウコは結構楽しんでいるようだった。

「自信でしょうか。気持ちで負けていたら勝てるものも勝てませんわ」

「そうね、それもたしかに重要。
でも一番重要なのはスイッチを切り替えることよ」

彼女は一瞬だけ魔術師としての顔でニヤける。もちろんそんな微妙たる差に気づくことが出来るのは私と鮮花だけだ。

「スイッチを切り替える…ですか？」

「そう。戦う時、ただのその時だけあなたたちは女であることを捨てればいいのよ。いつもはただの『若々しさ溢れる華の女子高生』でももちろん構わないわ。でも戦う時にはスイッチを切り替えるように武人になればいいの。呼吸法、体術、無、そして相手を倒すという強固なる意志」

魔術師が普段は一般人の中に紛れ込むように――。そして戦場では非道であれ。

つまりはそういうことだった。いつもならその一言で終わらせるだろうことをご苦労なことに長々と語っているわけだ。

私たちにとって当たり前のように知る常識に、クラスの子は新鮮味を帯びて、関心の視線をトウコに一直線に向かわせていた。

だがもちろん彼女はそんな視線など気にしない。

「私はこの授業を通してあなたたちの心にスイッチを作る手助けをします。完成させるのはあなたたち。

もちろんあなたたちが努力しない限りいつまでたっても実りはしないモノでもあるわ。

せっかくISを学びに来たというのですから、強くなるためにこれから一緒に頑張っていきましょう」

ハイ！というクラスメイトの大声に、私は溜息を一つつく。だってこんなにも見た目は平和なんだもの。

キンコンカンコン

チャイムが鳴ると、簡単な挨拶とともに授業は終わった。最後に教室を出る際にトウコはこちらを眼鏡を取り、見つめる。それも一瞬で、すぐに掛けなおすと彼女は愛想を振りまいて教室を出て行った。

協力関係？

「安心しましたわ。まさか訓練機で対戦しようとは思っていなかったでしょうけど」

休み時間早々ずかずかと敵意を隠さずにそいつは歩み寄ってきた。まったくご苦労なこつた。ところで、腰に手を当てるのは癖なのか？

「まあ？一応勝負は見えていますけど？さすがにフェアではありませんものね」

「？なんでだよ、オレお前とは一度も戦ったことないぜ」

戦ってもいないのにコイツは私に勝てるという絶対的な理由があるとしても言うのか。それはまたえらくなめられたものだな。

「あら、もしかしてあなた勝つつもりでいらっしゃいますの？このイギリス代表候補生、セシリア・オルコットに？」

「……変なことをいうやつだな。勝負をするっていうことは勝つ気があるってことに決まってるだろ？最初から負ける勝負なんて誰もやりはしないよ」

少なくとも私が本気で負けたのは黒桐幹也という名前の青年だけだ。あの無防備さには恐れ入るよ、まったく。

「そうですか、甘く見られたものですわね、わたくしも」

「別に、甘く見ているというわけじゃない。現段階でこのクラスで

一番強いのはあんだだろう。それぐらいにはあんだのことは評価しているつもりだぜ」

「ふん、当然ですわね」

ホント、偉そうな態度をとる女だな。

「だけど本当の實力は戦ってみないと分からない。それはお互い様だろ？」

「それはたしかに、そうですわね」

どうやら、ある程度の理屈は弁えているようだ。まあ、そうじゃなきゃ代表候補生なんて勤まらないだろう。嫌いじゃないぜ、こういった類の傲慢ながらもちゃんと現実も弁えている奴ってのは。

「だろ？なら戦う前からそうやって言うのはよくない。おまえがオレを倒してから言うセリフだ、それ」

「……わかりましたわ、ならば戦場のはっきりと白黒つけて差し上げましょう。わたくしのブルー・ティアーズで」

「ああ、楽しみにしているぜオルコット」

IS自体は興味がないが、こいつとの戦いっていうのには興味が湧いた。

「式、一緒に昼食に行きましょう？」

トウコとクラスの外で話し込んでいたらしい鮮花は私とオルコッ

トを視界に捉えるなり、そういつてきた。もうそんな時間か。

「ああ。……オルコット、おまえも一緒に来るか？」

なんとなく、声をかけた。別段理由はない。ただこのまま何も言わずに行くのはなんとなく気が引けたからだ。

もちろん彼女はばつが悪そうに

「いえ、遠慮しておきますわ」

なんていつて自分の手提げを持って教室から出て行った。

食堂ではまたもや女子が群れを成していた。まあ、それだけなら当たり前のことだ。ここは一人を除いて全員女だからな。

何故、そんなことをわざわざ気にするかというのも結構わかりやすい理由である。その中心点にいるだろう人物は、一応クラスメイトだからだ。

相変わらず織斑に女子どもは興味津々らしい。女子校だとそんなに男子なんて珍しいものだということが。

「でもほんと、私も礼園で1年過ごしたけど、ここまですごいだなんて思いもしなかったわ」

私の視線の先を読み、鮮花が言う。彼について興味を示していないのはもしかしたらこの学園では私と鮮花くらいなものなのかもしれない。

「お、式、黒桐さん！」

しばらく見ていると織斑の方が気付いた。織斑の隣には気付けば篠ノ之がいる。そういえばこいつら比較的よく一緒にいるな。

「今から飯か？ならよかったら一緒に食おうぜ」

既に席を確保しているらしく二人分席が空いている。これでは鮮花は断りずらいだろう。

「……式、どうする？」

「いいよ、別にどこで食べようと同じだ」

織斑と篠ノ之に気づかれないように囁きあう。囁きあうと言っても行動に出るほどではない。ただ小さな声で確認しあうように話すだけだ。

私と鮮花はトレイを持ち、空けてもらったスペースに座った。

「ありがとね、席空けてもらって」

鮮花が笑顔で礼を言う。私と違って社交的な鮮花はこういったやりとりが得意だ。

「いや、俺達も知らない人が隣に来るよりは気楽でいいからさ」

篠ノ之が織斑の言葉に何やら微妙に不服そうな顔をしている。
…大体察しはつくが、私は関係ないぞ。

「安心しろ、オレと鮮花はそういうつもりは一切ないぜ」

「そ、そうか……すまない勘違いしてしまったようだな」

お、どうやら一言で通じたらしい。中々察しが良いようだな。

「ん？ 箒、何を勘違いしたんだ？」

「いつ一夏には関係ないっ！！」

「あ、もしかして篠ノ之さん……」

鮮花も察したようで、苦笑する。篠ノ之は照れたようにそっぽを向いている。

「なんでそこで怒るんだよ……」

「怒ってなどいない！」

「……この唐変木」

「式に同意」

「…えー、なんでだ……」

頭をがつくりと下げる織斑。自業自得だ。

「そういえばまだちゃんと挨拶していなかったな。私は篠ノ之箒。名字で呼ばれるのは苦手だな、箒と呼んでくれ」

「オレは両儀式。奇遇だな、オレも名字で呼ばれるのは嫌いだ、式でいい」

「私は黒桐鮮花。どっちでもあんまり気にしないタイプだけどそちらが名前で呼べということなら、こちらも鮮花でいいわよ」

「よろしく、式、鮮花」

意外と箒は友好的だった。おそらくライバルではないということがわかってすっきりしたことが一番の原因なんだろうが。

「ああ、よろしくな箒」

「よろしく箒」

簡単な挨拶とともに昼食は始まる。てきとうに鮮花が話題を振っては織斑や箒が相槌を打ったりしている。私はほぼ無言だ。

「へえ、それじゃあ箒と織斑くんは幼なじみなんだ？」

「ああ、そうだよ。正直、箒がクラスにいてくれて助かったよ」

「まあ男一人で女クラに入るのは勇氣いるわよね」

わかるわかと頷く鮮花。おまえも女じゃないか。

「でも安心して。そこにいる式は一人称と同じで男みたいなやつだから」

「……そこでなんでオレが出てくるんだよ」

「あら、そもそもはつきりさせないあなたが悪いのよ。あなた本当は男じゃないでしょうね？」

「……またこの質問か。ホント鮮花はどうでもいいことを気にするんだな。」

「……………」

無言で法蓮草のお浸しを口にする。するとやはり無視された鮮花は不機嫌だ。

「……？式はどう見たって女子だろ？たしかに顔は中性的だけどさ」

「……………」

こいつはまたどうして……。

「一夏の言うとおり、私からしても式は女に見えるが…、だがどうして『オレ』口調なんだ？」

「……関係ないだろ、口調なんて」

私だって無意識に行ってしまうのだ、仕方ないだろう。織のことを覚えていてほしいから、だなんて鮮花に言うのは筋が通ってない。

それに――、きっと私が覚えておいてもらいたいののは幹也だけなんだろう。黒桐幹也は式と織の夢なのだから。

「まあ、そりゃあそうだな」

「……ふん、兄さんも兄さんです。こんな女と付き合ってるだなんて」

ぶつぶつとパンをちぎりながら鮮花は言う。……どうでもいいけどあのままじゃパン全てがちぎりすぎてクズの山になるぞ。

「……なんだ？焼きもちか、鮮花」

「ちよつ――！？」

お、顔が赤くなった。単純だな鮮花は。

「ん、黒桐さんどうしたんだ？いきなり顔を赤くして、熱でもあるのか？」

「い、いや大丈夫！」

「そうか？無理はするなよ。……そういえば、式、箒」

「…なんだ？」

「……」

「いやさ、よかったら一緒にISの特訓しないか？できれば箒に指導願いたいんだが……」

「…そんな話は聞いてないぞ、一夏」

不機嫌を隠さずに筈は言う。……こいつ今思いついて言っただろ。

「ほら、俺も式に押しつけちゃったみたいな感じあるしさ。

出来れば訓練って人数多い方がいいだろ？後のこともあるし、できれば一緒にできればなあ…と」

「ふうん、いいんじゃない？式。どうせISなんてほとんど触ったことないんだし。ねえ、よかったら私もいい？見学するだけでも中々面白そうだし」

「ああ、もちろんさ」

「「ちょっと待て！」」

つい筈と言葉が重なる。お互い、人の意見を聞かずにどんどん話を進めていくパートナーだと苦労するな、まったく。

「なんだよ？」

「……オレはまだ一緒に訓練するなんて言っていないぞ」

「私もだ一夏。何故私がおまえの自業自得に付き合わなければなら
ない！」

「嫌なのか？二人とも」

「別にイヤ、というわけではないが……」

箒は渋々頷く。

ただ、やっぱり私も箒も勝手に話を進められていくのは気に食わない。だから私はそっぽを向いたままだ。

「ならいいじゃないか」

「……」

「ほら、式も一緒にやろうぜ」

「……式」

鮮花まで……。こいつは私の人嫌いを知っているはずだと思うんだけどな。

「はあ…、わかったよ。付き合えばいいんだろ付き合えば」

もうどうにでもなれ。そんな気分で言葉を投げやる。すると単純なことにそれだけでも織斑は喜ぶ。

ホント、莫迦なやつだ。

「……今日の放課後、剣道場に来い。ISの操縦の前に二人の腕前を見せてもらう」

……そういえば昨日の夜、剣道着を着ていたな箒。

「あー、こう見えて式、剣道とか武術に関することは強いのか？」

「おお、そうなのか。うむ、それは楽しみだ」

いきなり元気になる筈。ふむ、筈は武人としての心得が中々にあるようだ。

「お、俺もやるのか？」

「「当たり前だ」」

また言葉が重なる。もしかしたら筈とはなかなか気が合うのかもしれない。

「……わかったよ」

荷が重いとばかりに織斑は肩を落とす。……正直、筈はどうしてこんな奴が好きなんだろうな。

協力関係？（後書き）

もちろんながら鮮花と式は幹也が好きなので一夏には振り向きませ
ん（あ

ISなしでも女は強いんです

「どういうことだ」

「いや、どういふことって言われても……」

時間は放課後、場所は剣道場。織斑ギャラリーは当たり前のように満載で、当の織斑はというと箒に怒られていた。

手合わせを開始してから十分といったところ、あっけなく織斑の一本負けだった。面具を外した箒の目尻は当然のごとくつり上がっている。

「どうしてここまで弱くなっている!？」

「受験勉強してたから、かな？」

「……中学では何部に所属していた」

「帰宅部。三年連続皆勤賞だ」

織斑が言った瞬間、箒の中で何かが切れるような音がした。

「——なおす」

「はい？」

「鍛え直す! IS以前の問題だ!これから毎日、放課後三時間、私が稽古を付けてやる!」

「え。それは式たちにも迷惑かかるし——ていつかISのことをだな」

「いや、別にオレ達は構わないよ。どうせ専用機は届いていないんだし、箒の好きにやればいい」

「……だそうだ。だいたい何がISだ！それ以前の問題だと言っている！」

どうでもいいけど、すごい怒りっぷりだな。織斑が何を言おうと焼け石に水だなこりゃ。

「情けない。ISを使うならまだしも、剣道で男が女に負けるなど……悔しくはないのか、一夏！」

「そりゃ、まあ……格好悪いとは思っけど」

「格好？格好を気にすることが出来る立場か！それとも、なんだ。やはりこうして女子に囲まれるのが楽しいのか？」

次は織斑が切れる番だった。珍しく表情が険しいものになる。此奴でもこんな顔をするんだな。

「楽しいわけあるか！珍動物扱いじゃねえか！その上、女子と同居までさせられてるんだぞ！何が悲しくてこんな——」

「わ、私と暮らすのが不服だというのかっ！」

バシーン！間一髪、織斑が振り下ろされた竹刀を竹刀で受け止め

ていた。……反射神経はいいんだな。

「お、落ち着け箒。俺はまだ死にたくないし、お前もまだ殺人犯になりたくない年頃でもないだろ？」

正直、両手で打ちにかかっているのを片手で防いでいるあたりは評価するべきなのかもしれないが、言っている言葉のせいであり、と言っていいぐらい台無しだ。

「箒、な？頼むから。今度なんかおごるから」

「この根性なし」

「……ふん、軟弱者め」

「なっ、根性なしって…それなら式はどうなんだよっ？」

「オレか・・・？いいぜ、相手になってやっても」

いつも織がやっていたのだ、私にだって出来る。

「よし……俺だってそこそこできるところは見せてやる！」

「言ってる優男。優しさだけじゃオレに剣術で勝てると思うな！」

「あっちゃー……」

鮮花が額に手を当てながら溜息をつく。それを不思議そうにみる箒。

私は竹刀を握るや、構えをとる。

先に動き出したのは織斑の方だった。甘い、いくら剣筋としてはいい線いつているとはいえ久しぶりに握った竹刀で、先制攻撃とは何事だ。私はスラリと避けると面抜き面で一気に勝負を付けた。

「うつ……」

「莫迦」

スピードは中々のものだがそんなじゃ女にやられて当たり前だ。

「こ、心が砕けそう……」

「箒の言つとおりこんなじゃISどころの話じゃないぜ、おまえ」
実際素人はやれても今の織斑では初段の相手すら厳しいかもしれない。

織斑はというと箒に打たれた小手が今になって痛み出したらしく、もう片方の手で手を支えていた。

「織斑くんてさあ」

「結構弱い？」

「ISほんとに動かせるのかなー」

ひそひそと織斑についてきていたギャラリーが落胆の声をあげる。

とはいっても比べるのはなんだが彼女等では鮮花にも及ぶか怪しい。偉そうに言う資格なんてないだろう。

そう、今織斑にそんな台詞が吐けるやつがいるとしたら私と箒ぐらいだ。

「だが、すごいな今の動き、相当訓練していると見えるが？」

箒が興味深そうに言う。私はどうでもいいことのように言葉を放った。

「家柄さ。昔から稽古は付けてもらっていた。と言ってもオレの専門は剣道ではなく剣術だよ」

「なら、なおさらすごい。是非私も一本お願いしたい」

「いいぜ。オレも久しぶりに骨のある奴と戦いたいしな」

再び面を被る。少々体が重くなるので胴着は嫌いなのだが剣道ではそれがルールだから仕方ない。

準備が整うとともにすぐに戦いは始まった。女の割には一撃一撃の重さが相当なものである箒の小手を私は上手い具合に竹刀で振り払う。そしてすかさずにカウンターを入れようとするが、箒はすぐにそれに反応し、紙一重の部分で上手く躲してくる。これでは織斑が箒に勝てないのが当たり前だとさえ思ってくる。ああ、剣道家としては年の割には相当なレベルだ。全国大会優勝経験者というのも頷ける。

知らず私の口元が笑みの形へと変わっていた。もちろんながらそ

んな些細な表情の変化は面を被っている故に誰も気付きはしない。

「クッ——！」

「はあっ——！」

互いに口から言葉にならない声が漏れる。既に10分近く時間は経過していた。

「す、すげえ……」

「こうなったら決着がつくまで止まらないわね……式のやつ」

織斑君や織斑君についてきた子たちが感嘆の声を上げる隣で、私は大きなため息を吐いた。もしも彼女が剣道ではなく、戦闘をやっていたとしたらあっけなく勝負はついていただろう。

彼女は本気になれば鍵さえも定規で殺してしまうような異常者なのだから。

だが、思ったよりかは幾分かは早く勝負がついた。強く打ちつけられた一撃により、筭の体がわずかにぐらついた隙に式の面がクリンヒットしていた。

「…私の負けだ。」

鮮花が強いというだけあるな。また近いうちに手合わせ願おう」

かなり筈は悔しそうだった。だがそれと同時に負けたことに対して蟠りはないらしく、式を褒めてさえいた。

「ああ、オレも久々に楽しめた。いつでもこういうのは大歓迎だぜ」

……胴着を暑苦しそうに脱ぎ捨ててさえいなければとてもかっこいい台詞なんだけどなあ。

「……………トレーニング、再開するか」

苦笑する私の隣で織斑君がそんなことを呟いていた。

この世の操縦者

「……トウコ」

「学校では蒼崎先生と呼んでくれると助かるんだけど…何？」

眼鏡で優しく微笑むトウコ。

……やっぱ一度ぶん殴りたくなってきたぞ。

「今日、月曜だよな？」

「ええ、そうね。たしかオルコットさんとの対戦日だったわよね。
頑張ってね、式さん」

「その対戦に使うISはおまえが手配したと聞いたんだが？」

「ああ、それね。今さっき届いたところなのよ」

簡単に説明すれば、これはつまり……………。

「ぶっちゃけ本番で頑張って」

こういうことだった。

「なあ？トウコ。おまえ仮にもカウンセラー名乗るなら、今オレが
考えていることわかるか？」

カウンセラーと読心術は全く関係ないわけだが、そんなのはもう

どうでもいい。

「うーん、ふざけるなとかそういうところかしら？」

「大当たりだ！まったくいったい何を考えてるんだ……！」

「まあ、そういうな式。その代わりお前に最も適した形のISだ。君になら練習などせずともアレは使いこなせるよ」

口元を歪めたトウコはいつの間にか眼鏡を外していた。

「自信満々だな」

「そりゃあそうだ。おまえと鮮花のISは特注品だからな。おまえたち二人にしかアレは扱えんよ」

口ぶりからして、何か特殊なことをやったようだ。この魔術師、相変わらず侮れないな…。

「ついて来い、式」

「……ふん」

鈍い音がして、ビット搬入口が開いた。防御壁が重い駆動音を響かせながらゆっくりとその向こう側を晒していく。

そこには見慣れた青年がいた。そして、もう一つ。彼が見上げる先にはターコイズブルー色の軽装ながらもがっしりとしたISが、その装甲を開放してまだか、と操縦者を求めるように佇んでいた。

「……式、橙子さん！」

今気付いたのか、青年…黒桐幹也はこちらを視認すると歩み寄ってきた。

「ご苦労、黒桐。…式、これがお前のIS、通称『太極』だ」

「太極・・・何の冗談だ？トウコ」

太極とは万物の根源のことだ。『易有太極 是生兩儀 兩儀生四象 四象生八卦 八卦定吉凶 吉凶生大業』（易に太極あり、これ兩儀を生じ、兩儀は四象を生じ、四象は八卦を生ず。八卦は吉凶を定め、吉凶は大業を生ず）。私の兩儀という名字はここからきている。

「冗談じゃないさ。正真正銘、これがおまえのISだよ」

「……ま、名前なんて無意味ではあるけど」

「式、今からさっそく模擬戦だって聞いたんだけど…大丈夫？」

心配げに幹也は呟く。私は幹也のいかにも『心配してるんです』って顔を見ているとどうも調子が狂ってしまう。故に無意識に顔を逸らすと、幹也はすぐにむっとむくれる。……どっちが男だか女だか反応に困るぞ。

「その言葉、オレに使う台詞じゃない。……戦いにおいてオレに大丈夫じゃないことなんてないよ、幹也」

「そりゃあ…まあ、そうだけど」

「そんなに心配なら、模擬戦だけでも見ていくといい。私が許可を出そう」

「……なっ！？トウコ！」

煙草を吸いながらどうでもいいことのようにトウコは吐き捨てる。そんなんでいいのか、この教師もどき。

「お、いいんですか？」

「ああ、ISの生の戦闘、見る価値はあると思うぞ」

……無視かよ。

「ではお言葉に甘えさせていただきます」

「幹也…おまえまで……」

「いいじゃないか、式。…それとも、何か疾しいこともあるの？」

「そんなのあるわけないだろ莫迦！勝手にしやがれ」

「うん、僕はいつでもそのつもりだよ」

笑顔で答える幹也に私はひそかに敗北感を覚える。

だが、実をいうと彼が試合の間まで近くに来てくれるのは嬉しかった。ま、当然のことながら絶対本人にはいつてやらない台詞だけど。いつも調子を狂わせられるのに、それでも何故か幹也の傍にいと落ち着けるのだからしょうがない。

「さて——もうそろそろ時間だ、式」

「ああ、勝敗に興味はないけど。やるからには勝つてくるとするさ。イギリスの代表候補生というやつにさ」

トウコに促され、私はISに手を触れる。

「……………！」

触れた瞬間、これが何なのか理解した。確かにこれは太極なんだ。

「背中を預けるようにすればいい。後はシステムが小難しいところはやってくれるよ」

トウコに言われたように、太極に体を任せる。受け止められるような感覚の後、すぐに私の体に合わせて装甲が閉じた。

空気を抜くような音が響く。そして、不思議と元からわが身であったかのような一体感を感じる。なるほど、たしかにこれは私のためだけのISだ。その時、私と太極が本当の意味で繋がった。

「……………！」

——戦闘待機状態のISを感知。操縦者セシリア・オルコット。

ISネーム『ブルー・ティアーズ』。戦闘タイプ中距離射撃型。特殊装備有り――。

自然と脳裏に焼き付くかのように、情報が脳に流れ込む。

「ISのハイパーセンサーは問題なく動いているようだな。問題はないか？式」

確認するようにトウコは言う。その横では幹也が苦笑している。

「ああ、何も問題はないさ」

「そうか、ならいい」

トウコは魔術師として笑う。ほんのわずかにトウコの表情に現れたそれを忠実にISのハイパーセンサーが伝えていた。

なんとなく私は鮮花の方に意識を向けた。目を向ける必要はない。だって、自分の周り360度全方位が『見えている』から。

「……………」

一夏と箒と一緒に、ゆつくりとトウコの元へ歩み寄っていた。その視線をこちらから外さずに。心配をしている様子はなかった。まあ、当然か。

「オレが勝つたら、クラス代表は織斑だな」

「えっ！？マジかよっ」

想像していなかったようで、相当焦っていやがった。

「精々、セシリアが勝つように祈っておくんだな」

「…ああ、でも俺が勝ってほしいのはどっちかと言ったら式だから」

「……！？」

なんでコイツに私が驚かせられてんだ……。

聞かなかったことにして私はビット・ゲートに進む。かすかに体を傾げるだけで、太極はふわりと浮かび上がって前へと動いた。

機械音が少しやかましく感じる。クリアーな意識の、その裏側では太極が膨大な情報量を処理していた。

まあ、私には大して関係ないことだ。……ゲート解放まであと二・五七二八四二二秒——『敵』がそこにいるのだから。

この世の操縦者（後書き）

太極は一応白式に近い武装です。遠距離武装は皆無といって等しいです。

ちなみに鮮花のISは中距離仕様です。

クラス代表決定戦

「あら、逃げずに来ましたのね」

セシリアがふふんと鼻を鳴らす。おまけにまた腰に手を当てたポーズだ。ほんと好きなんだなその格好。

だが私の関心はそんなところには微塵もない。彼女の日常と変わらない姿なんて別に戦闘中以外でも見られるのだから。

そう、関心があるのは彼女のIS——鮮やかな青色の機体『ブル・ティアーズ』に、だ。その外見は、特徴的なフィン・アーマーを四枚背に従え、どこか王国騎士のような気高さを感じさせる。……その気品がありながらも、派手な姿はセシリアの性格さえよく表われていた。

セシリアの手には二メートルを優に超す長大な銃器——太極が自動的に検索した結果によると、六七口径特殊レーザーライフル《スターライトmk?》と一致——が握られていた。ISは元々宇宙空間での活動を前提に作られているそうで、基本的に空中に浮いている。それが理由か自分の背丈より大きな武器を扱うのは珍しくないらしい。

アリーナ・ステージの直径は二〇〇メートル。八社から目標到達までの予測時間。・四秒。すでに試合開始の鐘は鳴っているので、いつ撃ってきてもおかしくはない状態だ。

「最後のチャンスをあげますわ」

腰に当てた手を私の方に、びつと人差し指を突き出した状態で向けてくる。左手の銃は、余裕なのかまだ砲口が下がったままだ。

「チャンス？なんのことだ」

「わたくしが一方的な勝利を得るのは自明の理。ですから、ボロボロの惨めな姿を晒したくなければ、今ここでわたくしに忠誠を誓いなさい」

そう言っ て目を笑みに細める。――警戒、敵IS操縦者の左目が射撃モードに移行。セーフティのロック解除を確認。

ああ、それは別に問題ない…だが。

「――はあっ？」

突然のセシリアの台詞に私は腹を抱えて笑いたくなる衝動を必死に抑えながら、聞き返すように呟いた。といつてももちろんすべてを抑えられるはずもなく、私の口元は笑みを湛え目は信じられないものを見るかのように呆れていた。

「ちょっと、なにがおかしいんですの!？」

「い、いや――。だって…そうだろ？何を言い出すかと思えば…」。途中までの台詞は王道だな、なんて考えてたものの後からの台詞はなんなんだ一体」

「なんなんだって…もちろん、あなたをわたくしの忠実なしもべにして差し上げましょうといういましたのよ。あなたも本望でしょう？」

おお、そんな奴隷のようなものが本望だとおっしゃるか。さすが英国日本とは文化が違っていらっしゃるようです。

観客席で橙子さんと鮮花、そして式と鮮花のクラスメイトと思われる二人と一緒に二人の会話を聞いていた僕は一瞬我が耳を疑った。

「式に忠誠を誓わせるって……」

「無理ね」「

鮮花と橙子さんの言葉が重なる。うん、正直僕もそう思う。

「式、すごい言われようだな……」

「まあ、たしかに式は人の言うことを何でも聞いて実行するようなタイプじゃなさげだよな……」

この二人もなかなか式の性格についてわかっているようだ。

「そういえば、二人は……」

今更だが名前を聞いていないことを思い出す。

「ああ、紹介していませんでしたね。こちら織斑一夏さんと篠ノ之箒さん。二人とも私と式のクラスメイトです」

「織斑一夏です」

「篠ノ之箒だ」

「僕は黒桐幹也。名字の通り鮮花の兄だよ」

そういえばこの一夏って子が例の唯一ISを使える男の子・・・だっけ。見た目普通の男の子のようだけど。

「へえ、黒桐さんのお兄さんか。なんだか似てないな」

「こら、一夏失礼だろ！」

僕が返事をするよりも先に篠ノ之さんの手が先に織斑君を殴っていた。もちろん、痛みに頭を織斑君はかかえ中である。別に結構事実だったりするから気にしないんだけどなあ。

「私と兄さんはもう長い間ともに過ごしていませんから。しょうがないでしょう」

澄ました顔で鮮花が答える。鮮花が養子に行つて以来たしかに、僕の高校1年の正月までずっと音沙汰なしだったのだ。しかも今は橙子さんの1番弟子ときたものだ、やれやれ。

「そういえば幹也は何故ここにいるのだ？」

初対面から下の名前で呼ぶのは癖だろうか…いや、それとも鮮花がいる手前、名字で呼ぶのを控えたのか…どちらかというと両方が…篠ノ之さんは何気ない感じで聞いてきた。

「ああ、僕は式と鮮花のISを運んできたんだよ」

式のIS『太極』と鮮花のIS『焰爛礼夜』二つは橙子さんが知り合いに頼んでこじつけたらしい特別専用機だ。

そして届いた途端、僕は橙子さんからの単刀直入すぎる「今すぐIS学園まで運んで来い」という言葉の下、学人に連絡を入れて二人で1台ずつトラックで運んできたわけだ。後で学人にはお礼になにか頼みを聞かねばならないだろう。やけにモノわかりが良かったあたり、絶対何かある、というのが僕のよみだ。

「なるほど」

織斑君は納得したらしくうんうん首を縦に振っている。

——何にしても、式が無茶をしなければいいんだけど。

僕は式を見つめながら、橙子さんの横で腰を下ろした。そんな僕たちの会話をしっかりと式が聴いていることさえも気付かずに。

「いいだろう。オレが負けたらその条件飲むよ。——ただし、それは負けた時の話だ、オルコット」

「…………それは、棄権する気はないということでしょうか？」

オルコットの視線が鋭くなる。いいぞ、そうでなくちゃ面白くない。

「当然だ。オレはこの戦いを愉しみにしてたんだ。わざわざ自ら辞める理由はないよ」

不敵に笑う。私はすでに戦闘態勢を整えている。彼女が動けば即時に反応できるぐらいには…ね。

「残念ですわね。なら、徹底的に倒して御覧にいきましょう!」

——警告! 敵IS射撃体勢に移行。トリガー確認、初弾エネルギー装填。

うるさいアラートとともに、耳をつんざくような音が閃光となって私の顔の真横を走る。

ガードするまでもなく、即座に動けたあたり自分でも少し驚きだ。それぐらいこのISは私に馴染んでくれていた。

「わたくしの初撃を避けますなんてなかなかいい腕していらっしやいますのね」

「お褒めの言葉ありがとう。でも、これぐらいだと思われちゃ困る」

私は装備一覧を覗きながら答える。——ふん、トウコの奴、味な真似をしてくれる!

武器のところに書かれているのは一つのみ。干将莫耶……二対

の夫婦剣の名だ。太極図の描かれた短剣は私の戦闘にはちょうどよかった。

私は干将莫耶を呼び出し、展開する。

高周波の音とともに、私の両腕から光の粒子が放出される。それは手の中に形となって、収まった。

その名の通りの太極を現した夫婦剣が目の前に現れる。

「中距離射撃型のわたくしに、近距離格闘装備で挑もうだなんて……笑止ですわ!」

すぐさまオルコットの射撃がめめあられと襲ってくる。私はいつもの戦闘と同じように身をひねって躲す。もちろんそのまま相手との距離を縮めていくことも忘れはしない。

口元を笑みの形に歪め、私はその高揚のままに駆け抜けた。

「ふむ、想像よりもセシリアさんはやり手のようね……」

橙子さんが顎に手を当てたまま答える。その横では鮮花が興味深そうに戦闘を見入っていた。

「あれで本当にESに乗るの初めてなんて…相変わらずとんでもスキルね…」

「え、式はISに乗るの初めてなのか!？」

驚いた声は織斑君の物だ。もちろんその横の篠ノ之さんも驚いてはいるようだ。

「初めてって…試験の時は？」

「私達推薦合格みたいなものの」

さらりと答える鮮花。実際は無理やり入れられた、というのが正しいのだが。

「へえー……ってことは鮮花さんもIS経験はないのか」

「ええ、私も今回頂いた専用機が初めて乗るISとなるわね」

「なっ…なんか、壁を感じる」

織斑君も無理やり入れられた口だろうに、げんなりしている。そんな彼をよそに式は確実に敵ISとの距離を縮めていた。

既に彼女が本気になれば一気に踏み込める距離だ。

だがあと少しというところで敵ISはフィン状の直接特殊^{BT}レーザーによる攻撃を始めた。

「では閉幕^{ファイナル}と参りましょう」

ビットが二機多角的な直線起動で式に接近している。

「——っ！」

だがそれさえも式は上手く躲しきってみせる。今までの攻撃すべてを防御もせずに躲しているのだ。その姿は舞を踊るかのように美しい。観客席にいるほとんどの人間が式の姿に魅入っていた。

——このやかましいハエみたいな、いい加減うるさい！

眼に意識を集中させる。そのまま周りを動くビットを干将を振り上げ、近くにある1機を破壊した。死の線通りに殺せば容易い。

「なっ……っ！」

驚きはオルコットのもの。だがそれぐらいで驚かれていては困る。そのまま勢いに身を預け、彼女が命令を下す前に素早く破壊していく。

「……お前は制御に意識を集中させている間は他の攻撃が出来ない。それなら別に奇襲を気にせずに破壊できるからな」

言葉に出すと同時にまた一つ破壊する。

「……………っ！」

図星を突かれたオルコットは冷静そうで冷静さを欠いた最もわかりやすい戦闘法で私を襲う。私の弱点を突こうという考えこそが単

純だということに気づいていない。

莫耶の剣先がブルー・ティアーズを捉える。そのまま真っ直ぐに切りつけ、相手のエネルギーを奪う。だが――

「――かかりましたわ」

にやり、と。オルコットは笑う。罨と気付いて干将莫耶をクロスさせて防御するのも遅し、彼女の影から現れた『^{ミサイル}弾道型』を、もろに私は防御の上から喰らった。

「――式っ！」

つい、立ち上がり煙が上るその場所を見つめる。それは無言のままの橙子さんと鮮花。それと織斑君と篠ノ之さんも同じだ。だけど、橙子さんはあまり心配してないらしく、まだ余裕さを保っていた。

煙がゆっくりと薄れて行き、影が見える。そこには――

目を蒼く光らせた式がニヤリと口元を歪めながら双剣を構えていた。

「驚いたよ、まったく……冷静さを失っているという判断はオレの完璧な誤算だったか……見直したよ、セシリア・オルコット。だから、手加減なく問答無用で倒させてもらう——！」

くつくと嗤う。これほど面白いことはない。

——フォーマットとフィッティングが終了しました。確認ボタンを押してください。

……なんだ？

とりあえず、言われたとおりに確認ボタンを押す。すると情報が一気にIS内を駆け巡り、IS装甲が新しく形成されていた。元々軽装であったIS装甲は更に私の体に合うようにセッティングされていく。

そして——

「古刀……か。ほんと味な真似をしてくれる！」

手に握ったのは天叢雲……。まさかこんなものまで偽物とはいえず用意しているとは。

一瞬でオルコットの懐へと飛び込んだ私は躊躇わずに死の線に触れないように切り裂いた。殺すのが目的ではないのだから、それだけで十分なのだ。

『試合終了。勝者——両儀式』

最後だけ少しつまらなそうに私はそんな表示を見守っていた。まあ、私よりも不服そうな顔をしているやつが隣にいるが。

「……負けましたわ。わたくし、完全にあなたを甘く見ていましたわね。先ほどの言葉はすべて取り消させていただきますわ」

「別に、そういうのはどうでもいいよ。オレは戦いを愉しませてもらった。それだけの話さ」

むしろ感謝したいぐらいだ。正直に言えば私の方こそ彼女を見下していただろう。きつと、これからどんどん彼女は強くなる。そう思うのは難しくはなかった。

「あなた素敵ですわね、さっぱりとしていらつしゃって。……その、わたくしも篠ノ之さんみたいに名前と呼んでよろしいでしょうか？」

「むしろ、名字で呼ばれるのはあんま好きじゃない」

「そうなんですか？なら式さん、わたくしのこともセシリアとお呼びくださいな」

「……いや、さん付けもいらないんだけどな。まあ、もともとそういう癖なのだろう、妥協することにしよう。」

「ああ、別に構わないよセシリア」

人嫌いであるはずの私にとっては意外な台詞とともに今回の模擬戦は終了した。

クラス代表決定戦（後書き）

書いた後ちよつと式の一方的だったかなあ^^・と少し反省。
でも式の戦闘スキルが考えれば考えるほど人外レベルすぎて・・・
（ry

クラス代表決定

「この色男！」

式のそんな罵声で朝食はスタートした。そんなこと言われなきゃいけない覚えは俺の頭には全くだりとも存在しないわけだが…。

箒と鮮花に同意を求めてみるものの、前者は「式の言うことは至極もつともだな」なんて呆れながら侮蔑の眼差しをシャワーのように浴びせてくれて、後者は「ごめん、否定してあげられないかも」と苦笑しながら曖昧に答えられた。いや、なんでさ!?

俺の周りで変わったことといえば…。

「どうしたんですの?一夏さん」

セシリアからの扱いが極東の野蛮人から、下の名前にさん付けというものになっただけだ。これだって、式にやられたセシリアを慰めに行つて、ちよつとした仲直り(?)みたいなことをしていたらいつの間にかに呼び方が変わっていたというだけの話だ。そして、何故だか知らんが今は隣でともに朝食をとっている。

式はあからさまに機嫌が悪いようだった。視線を向けようものなら一瞬で死の予感がするような冷や汗を流す羽目にあう。一体何がそんなに彼女を機嫌悪くさせているのだろうか。

「そっぴや式が勝ったから一夏がクラスの代表なのよね?」

見るに見かねて…といった感じで鮮花が助け舟を出してくれた。

そういえば彼女も織斑君から呼び捨てに発展している。一体なんなんだ…いや、いいけどさ。

「……やっぱりそれは変わらんのか……」

改めて思い知らされるとがつくりくる。俺、そういうの向いてないんだけどなー。

「オレはメンドウなことは嫌いだからな。一夏に任せる」

式までも食べながらそう言う。これはもう、あれですか。おまえに選択肢はないからさっさとクラス代表やってろという押しつけですか、式さん。あれ、式まで下の名前で呼んでるし。

「当然だ。元々おまえに選択肢はないに決まってるだろ」

「…なんかやっぱり軽く人権を侵されている気が……」

「安心しろ。気がするじゃなくて、実際に人権無いから」

初めて今日その口元に笑みを湛えた式は、すっぱりと俺の人権を否定した。ああ、ここまで隠しようなく言われるとある意味すつきりするぐらいだぜ。

そんなこんなで俺達は中途半端なまま朝食を終え、朝のSHRへと向かった。途中、何故だか知らないが俺は筭とセシリアに挟まれていた。おまけにそれを見て呆れる式。一体なんなんだよ!?

「では、一年一組代表は織斑一夏くんに決定です。あ、一繋がりでもいい感じですね!」

山田先生の嬉々とした声がクラス内に響いた。それはクラスの女の子どもの大半もそうだ。ほんと男ってだけでどうしてこつもここの連中は騒がしくできるんだか。

「一夏さん! わたくし、セシリア・オルコットがIS操縦を教えて差し上げますわ! それはもう見る見るうちに成長を遂げることは決定事項です」

女つてのは恋すればすぐにコロツと変わるもんだな、なんてのんきに思う。明らかにセシリアの一夏への態度の変わりように内心ため息を吐く。これが一夏による無自覚になせる業だといふんだからある意味賞賛したくさえる。ここまで天然な女たらしなどそうそういないだろう、織がいたらそういうに違いない。

「あいにくだが、一夏の教官は足りている。私が、直接頼まれたかな」

『私が』を強調した筈は、異様に殺気立っている瞳でセシリアを睨んだ。これがあれか、所謂、男を取り合う女の戦争というやつか。

「あら、ISランクCの篠ノ之さん、Aのわたくしに何かご用かしら?」

「ら、ランクは関係ない! 頼まれたのは私だ。い、一夏がどうしても懇願するからだ」

へえ……？流し目に一夏を見てみると、そこまで言っていない、とても言わんがばかりに視線が泳いでいる。頼んだということ自体は間違いいではなさそうだが。

「え、箒ってランクCなのか……？」

「だ、だからランクは関係ないと言っている！」

すごい剣幕で怒鳴られた一夏はしゅんとなる。そういえば一夏はBランクらしい。意外だな、てつきり私はDランクとか落第点を取りかけているかと思ったのだが。まあ、このランクもあんまり意味はないと織斑先生は言っていたが。

「座れ、馬鹿ども」

すたすたと歩いていつてセシリア、箒の頭をばしんと叩いた織斑先生が低い声で告げる。

「その得意げな顔はなんだ。やめろ」

その後何故か余裕を持った笑みを浮かべていた一夏までもが出席簿で叩かれる。

「お前たちのランクなどゴミだ。私からしたらどれも平等にひよつこだ。まだ殻も敗れていない段階で優劣を付けようとするな」

さすがにセシリアも反論の余地がなかったようで、何か言いたそうだったが、渋々と何も言わずに俯いた。

「代表候補生でも一から勉強してもらつと前に言つただろつ。くだらん揉め事は十代の特権だが、あいにく今は私の管轄時間だ。自重しろ」

さすが先生ということだけはあつてしっかりしたことを言つていた。どこかの詐欺師とは大違いだな。

バシン！

良い音がしてまたもや一夏の頭に出席簿化クリーンヒットしていた。

「……お前、今何か無礼なことを考えていただろつ」

「そんなことはまったくありません」

「ほう」

バシンバシン！

「すみませんでした」

「わかればいい」

素晴らしいぐらいに良い音が響いた。そのうち手遅れなぐらいに莫迦になるんではないだろうか、こいつ。

「クラス代表は織斑一夏。異存はないな」

はいと一夏を除くクラス全員が一丸となって返事をしていた。

私は複雑そうに顔を歪めている一夏を見て、なんとなく、ほんの少しだけ笑みをこぼした。

クラス代表決定（後書き）

最初、セシリアを慰めに行くー夏君の部分も書きちゃったんですが、後から消しました^^;

こっけいなのは読者の皆様のご想像にお任せした方がいいかな、と

急上昇急降下訓練

「ではこれよりISの基本的な飛行操縦を実践してもらおう。織斑、オルコット、それと両儀。試しに飛んでみせる」

四月も下旬、遅咲きの桜の花びらがちょうど全部なくなった頃。俺は今日もこうして鬼教官こと千冬姉の授業をまじめに受けていた。

「早くしろ。熟練したIS操縦者は展開まで一秒とかからないぞ」

せかされて、意識を集中する。といっても式とセシリアは余裕の笑みを浮かべている。

ISは一度フィッティングしたら、ずっと操縦者の体にアクセサリーの形状で待機している。式は小型ナイフ（いつも一瞬のうちに取り出すけど、一体どこにしまっているのだろう）。セシリアは左耳のイヤークラス。俺は右腕のガントレット。……いや、普通はアクセサリーらしいんだが、俺と式のは防具と武器だよな。なんだろうか。

「集中しろ」

いかん、次は叩かれる。

俺は右腕を突き出し、ガントレットを左手で掴む。いろいろ試して、このポーズが一番集中できる——というより、ISが展開されるのをイメージできる。

（来い、白式）

そう心の中でつぶやく。刹那、右手首から全身に薄い膜が広がっていくのがわかる。約0.7秒の展開時間。俺の体から光の粒子が解放されるように溢れて、そして再集結するようにまとまり、IS本体として形成される。

ふわりと体が軽くなる。各種センサーが意識に接続され、世界の解像度が上がる。一度瞬きをすると、俺の体はIS『白式』を装備した状態で地面から十数センチ浮遊していた。

同じく、セシリアと式もIS『ブルー・ティアーズ』『太極』を装備して浮かんでいる。式との対戦で損傷したビットは、もう完全に修復が終わっているようだった。

「よし、飛べ」

言われて、セシリアの行動は早かった。その後を面倒くさそうに式が追う。急上昇し、遙か頭上で二人は静止した。

俺も遅れて後に続くが、二人の上昇速度と比べたらかなり遅いものだった。

「何をやっている。スペック上の出力では『ブルー・ティアーズ』より白式の方が上だぞ」

通信回線から早速おしかりの言葉を受ける。ちなみに急上昇、急降下は昨日習ったばかりだ。『自分の前方に角錐を展開させるイメージ』で行うらしいが、なんとなく感覚がつかめない。セシリアはともかく、式さえも一発で行ってしまうあたり何とも言えない部分があるが。

「一夏さん、イメージは所詮イメージ。自分がやりやすい方法を模索する方が建設的でしてよ」

「そう言われてもなあ。大体、空を飛ぶ感覚自体があやふやなんだよ。なんで浮いてるんだ、これ」

白式には翼状の突起が背中に二対あるが、どう考えても飛行機と同じ理屈では飛んでいない。大体、翼の向きと関係なく好きに飛べるのだから、ますます訳がわからない。

「説明しても構いませんが、長いすわよ？反重力力翼と流動波干涉の話になりますもの」

「わかった。説明はしてくれなくていい」

すぐさま断る。絶対、俺の頭では理解できない。

「そう、残念ですわ。ふふっ」

楽しそうに微笑むセシリア。その表情は嫌味でも皮肉でもなく、本当に単純に楽しいという笑顔だった。

「懸命だな。こういうのは言葉で聞いて理解できるもんじゃない。おまえはそこまで器用じゃないんだから理屈より体で覚えるほうが効率的だ」

そういう彼女も体で覚えている気がするが、そこは突っ込まないでおこう。何言われるかわからないし。

あの試合以降、何かと理由を付けては俺のコーチをセシリアは買って出てくる。それは非常にありがたいし、セシリアはさすがに代表候補生だけあって優秀だった。式は自身のISの操縦は今までの経験の延長線だ。と言っていたけどセシリアはISを操縦するためにたくさんの努力をしてきて、代表候補生となっているのだ。どちら自身も自身の頑張りによる結果ではあり、未だ中途半端な俺には太刀打ちできない相手だ。

しかし、いったいどういう心境の変化なのだろう。初めて会ったときのセシリアの態度が今では嘘のように思えてくる。式だって明らかに嫌われていると感じていたというのに、こうやって仕方なくという感じは抜けていないが、言葉をかけてくれるのだ。

「一夏さん、よろしければまた放課後に指導してさしあげますわ。そのときはふたりきりで――」

「一夏っ！いつまでそんなところにいる！早く降りてこい！」

いきなり通信回線から怒鳴り声が響く。見ると、遠くの地上では山田先生がインカムを箒に奪われておたおたしていた。ちなみにこの望遠鏡並みの視力も、ISのハイパーセンサーによる補正だ。地上二百メートルから箒のまつげまで見える。これは確かに悪用されたら大変なものだな。

「おまえ何か今へんなこと考えなかったか？」

式が怪訝そうにこちらを見ている。たぶん、そんなことはないと思うんだが。

「ちなみに、それでも機能制限がかかっているんでしてよ。元々I

Sは宇宙空間での稼働を想定したもの。何万キロと離れた星の光で自分の位置を把握するためですから、この程度の距離見えて当たり前ですわ」

さすがは優等生。知識面も大いに豊富だ。だが、二人して何故俺の考えていることがわかるんだ。ちなみに第の説明は

『ぐっ、とする感じだ』

『どんっ、という感覚だ』

『ずかーん、という具合だ』

と、かなり役に立たなかった。というか第は本当にあれでISを動かせるのだろうか。まだ訓練機実習も始まっていないので、第のレベルがわからない。

ちなみに、セシリアはそういう第の説明にいちいち突っ込んではいない。言い争いをして、それを式が笑いながら見物し、鮮花が呆れていた。そういえば、俺に対してのセシリアの態度が柔らかくなった分、第に対しては固くなったな。なんでだ？

「織斑、オルコット、両儀。急下降と完全停止をやって見せる。目標は地表から十センチだ」

「了解です。では一夏さん、式さん、お先に」

言って、すぐさまセシリアは地上に向かう。ぐんぐん小さくなっていく姿を、俺はちよつと感心しながら眺めた。

「うまいもんだなあ」

「慣れればすぐに誰だってできるようになる。それが早いか遅いかは本人の努力次第だな」

言いながら式も降下していく。そこには一ミクロたりとも迷いがない。

二人は完全停止も難なくクリアしたようだった。——よし、俺も行くか。

意識を集中。背中の翼状の突起からロケットファイアーが噴出しているイメージを思い描く。それを傾けて、一気に地上へ。

ギョーンッ——ズドォォンッ！！！！

地上には着いた。ただしこれは専門用語で墜落と言うらしい。体はGや衝撃から守られているが、心はクラスメイトのくすくす笑いに瀕死状態だった。出来れば心も守ってほしい。

「馬鹿者。誰が地上に激突しろと言った。グラウンドに穴を開けてどうする」

「……すみません」

とりあえず姿勢制御をして上昇、地面から離れる。ISのシールドバリアーのおかげで白式には汚れ一つない。

「情けないぞ、一夏。昨日私が教えてやっただろう」

腕を組み、目尻をつり上げている箒が待っていた。昨日教えたつて……あの擬音のことを言っているんだろうか。箒も冗談が言えるようになったようだ。うむ、感性の発達は素晴らしい。

「貴様、何か失礼なことを考えているだろう」

なんでバレるんだろうね、俺の考えてることは。

「だから顔に出てるって前にも言っただろ、莫迦」

うつ…、たしかに式が言うのも正しいのか…？この場合。というかそんなに俺は考えが表情に出るタイプだったかなあ。

「大体だな一夏、お前というやつは昔から——」

「大丈夫ですか、一夏さん？お怪我はなくて？」

「あ、ああ。大丈夫だけど……」

「そう。それは何よりですわ」

うふふと、また楽しそうに微笑むセシリア。うーん、女子の心変わりか気まぐれか、何にしても秋の空とか言ったやつは出てこい。天気より遥かに予測が難しいじゃねえか。

「……ISを装備していて怪我などするわけないだろう……」

「あら、篠ノ之さん。他人を気遣うのは当然のこと。それがISを装備していても、ですわ。常識でしてよ？」

「お前が言うか。この猫かぶりめ」

「鬼の皮をかぶっているよりマシですわ」

バチバチッ。二人の視線がぶつかって火花を散らした。いや、実際に火花は出てないけど。なぜだろうか、火花が見えた気がした。ISのハイパーセンサーはそんな機能まで搭載しているのか。だとしたらすごいが、とても無駄な機能だと言わざるを得ない。ていうかこのふたり、日増しに仲が悪くなっていくように見えるんだが、なぜだ？

「まあまあ落ち着いて、二人とも。一夏は怪我してないんだし、そんな些細なことで口論しててもしょうがないでしょ？」

鮮花が仲裁に入る。最近鮮花はよくこのポジションに立っている気がする。

と、そんな二人を押しつけて、千冬姉が俺の前に立つ。

「織斑、武装を展開しろ。それくらいは自在にできるようになっただろう」

「は、はあ」

「返事は『はい』だ」

「は、はいっ」

「よし。ではじめろ」

言われて、横を向く。正面に人がいないことを確認してから、俺は再度突き出した右腕を左手で握る。

—— 物体を斬る、刃のイメージ。鋭く、堅固な物体。強い、武器——。

（来い……！）

ぎゅうつと右腕を握りしめる左手。集中力が極限に達したとき、手のひらから光が放出される。そしてそれが像を結び、形として成立する。

光が完全に収まった頃には、俺の手には《雪片弐型》が握られていた。

（よし。必ず出せるようになったぞ）

これも、イメージが難しかった。だってそうだろう？手の中に剣が現れるイメージなんて、どこの日常生活でするんだよ。……式は一発である双剣を出してたけどさ。

「遅い。〇・五秒で出せるようになれ」

ぐあ。またこの人は……褒めもしないどころか、けなされた。これだって一週間訓練してものにしていたっていうのに。

「セシリア、武装を展開しろ」

「はい」

左手を肩の高さまで上げ、真横に腕を突き出す。俺のように光の本流を放出することはない、一瞬爆発的に光っただけだ。その手には狙撃銃《スターライトmk?》が握られていた。

俺よりも圧倒的に早い。しかも、銃器には既にマガジンが接続されていて、セシリアが視線を送るだけでセーフティーが外れる。一秒と経たずに展開、射撃可能まで完了していた。

「さすがだな、代表候補生。——ただし、そのポーズはやめろ。横に向かつて銃身を展開させて誰を撃つ気だ。正面に展開できるようにしろ」

「で、ですがこれはわたくしのイメージをまとめるために必要な――」

「直せ、いいな」

「――、……はい」

反論の余地は大いにあるような顔をしていたセシリアだったが、そこは千冬姉、ひと睨みで話が終わる。いい兵士が生まれそうだ。

「セシリア、近接用の武装を展開しろ」

「えっ。あ、はいっ、はいっ」

何か頭の中で文句を言っていたのだろうか（たぶんそうだろう）、いきなり振られた会話にびっくりして反応が鈍るセシリアだった。それを見ながら式が呆れている。

銃器を光の粒子に変換――『収納』^{クロース}というらしい――、そして新たに近接用の武装を『展開』^{オープン}。

けれど、手の中の光はなかなか像を結ばず、くるくると空中をさまよっている。

「くっ……」

「まだか？」

「す、すぐです。――ああ、もうっ！《インターセプター》！」

武装の名前を半ばヤケクソ気味に叫ぶ。それによってイメージはまとまって、光は武器として構成される。

しかし、これは教科書の頭の方に書かれている、いわゆる『初心者用』の手段であるらしく、それを使わないと武装を展開できない

というのは代表候補生のセシリアにとってはかなり屈辱的なことらしかった。

「……何秒かかっている。お前は、実戦でも相手に待ってもらうのか？」

「じ、実戦では近接の間合いに入らせません！ですから、問題ありませんわ！」

「ほう。両儀との対戦で初心者に簡単に懷を許していたように見えただが？」

「あ、あれは、その……」

「こによこによとまごついて、セシリアの言葉は齒切れが悪い。と
いうか式の場合、はたしてあの動きは初心者と呼んでいいものなの
だろうか。」

セシリアの様子を何の気なしに眺めていると、キツといきなり睨
まれた。

刹那、送られてくる個人間秘匿通信。
プライベートチャンネル

『あなたのせいですわよ！』

なんでそうなるんだよ。

『あ、あなたが、わたくしに飛び込んでくるから……』

そりゃ、私のISには近接用の武装しかないし、元々近接戦闘に特化しているのだからしょうがないだろう。

『せ、責任とっていただきますわ!』

むしろ、この場合私が被害者だと思うんだけど。

——ちなみに、私は通信の返事は一切行っていない。一方的に送られてくるだけだ。だというのになぜこつも都合がいいタイミングで台詞が流れてくるのだろう。

『そこはセシリアが近接武器も瞬時に展開できれば何の問題もないだろう？濡れ衣だぜ、それ』

しょうがないから返答しておく。

『うう…たしかにそれはそうかもしれませんが……』

しどろもどろにセシリアは答える。だがやはり納得はいつてないのか、視線が泳いでいた。

「次、両儀。武装を展開しろ」

「――」

構えをとる。いつも戦闘で戦う時の同じだ。ただいつも持ち合わ

せているナイフではないだけ。すぐにイメージと結びつき手には干将莫耶が具現する。

「ふむ、専用機を与えられただけのことはあるな。無駄がない」

「お褒めの言葉どうも。だが、こんなのできて当然なんだろう？」

「その通りだ。織斑、オルコット。両名、両儀に近接武器のことに
ついては指導を受けるといい。少なくとも近接武器に関してはお前
たちよりうえだ」

「「は、はあ……」」

「返事は『はい』だ」

「「はい！」」

進歩しないな…一夏のやつは。セシリアはセシリアで不満そうに
そつぽを向いてるし、一夏も叱られてげんなりしている。前途多難
だな、こいつら。

「時間だな。今日の授業はここまでだ。織斑、グラウンドを片付け
ておけよ」

ため息を吐きながら一夏は作業を始める。手伝ってやろうかとも
思ったが、自業自得だからやめておいた。

隣のクラスの転校生

「ふうん、ここがそうなんだ……」

夜。IS学園正面ゲート前に、小柄な体に不釣り合いなボストンバッグを持った少女が立っていた。

まだ暖かな四月の夜風になびく髪は、左右それぞれを高い位置で結んである。肩にかかるかからないかぐらいの髪は、金色の留め金がよく似合う艶やかな黒色をしていた。

「えーと、受付ってどこにあるんだっけ」

上着のポケットから切れの紙を取り出す。くしゃくしゃになったそれは、少女の大雑把な性格と活発さを非常によく表していた。

「自分で探せばいいんでしょ、探せばさあ」

ぶつくさ言いながらも、その足はとにかく動いている。思考よりも行動。そういう少女なのだ。良くいえば『実践主義』、悪くいえば『よく考えない』である。

——まったく、出迎えがないとは聞いてたけど、ちょっと不親切すぎるんじゃない？政府の連中にしたって、異国に十五歳を放り込むとか、なんか思うところないわけ？

少女は、ジャパニーズ日本人に似ているがよく見ると違う。その鋭角的でありながらもどこか艶やかさを感じさせる瞳は、チャイニーズ中国人のそれだった。

とはいえ、この少女にとっては日本は第二の故郷であり、思い出の地であり、因縁の場所でもある。『人に歴史有り（history is history）』とはよく言ったものである。

（誰かいないかな。生徒とか、先生とか、案内できそうな人）

学園内の敷地をわからないなりにあるきながら、きよろきよろと人影を探す。とはいえ時刻は八時過ぎ、どの後者も灯りが落ちているし、当然生徒は寮にいる時間だった。

（あーもー、面倒くさいなー。空飛んで探そうかな……）

一瞬、『それは名案！』と思った少女だったが、あの『アナタの街の電話帳』三冊分に匹敵する学園内重要規約書を思い出して、やめる。

まだ転入の手続きが終わっていないのに学園内でISを起動させたら、事である。最悪、外交問題にも発展する。それだけは本当にやめてくれ、と何回も懇願していた政府高官の情けない顔を思い出して、少女の気分はちよつと晴れた。

（ふっふーん。まあねー、私は重要人物だもんねー。自重しないとねー）

正直に言って、自分の倍以上も歳のある大人がへこへこ頭を下げるのは、ちよつと気分がいい。

昔から、『歳をとっているだけで偉そうにしている大人』が嫌いな少女にとって、今の世の中は非常に居心地が良かった。

男の腕力は兇戯、女のISこそ正義。それもまた気分がいい。少女はかつて、『男っていうだけで偉そうにしている子供』が大嫌いな子供だった。

——でも、アイツは違ったなあ。

とある男子のことを思い出す。その男子のことは、少女にとって日本に帰ってくる最大の理由になっている思い出だ。

——元気かな、アイツ。

まあ、元気なんだろうけど。元気のない姿を見たことがない。そういうやつだったから。

「だから……でだな……」

ふと、声が聞こえる。視線をやると、女子がIS施設から出てくるようだった。どこの国でもIS関連の施設は似たような形をしているから、すぐにそうだとわかる。

——ちようどいいや。場所聞こつと。

声をかけようとして、少女は小走りにアリーナ・ゲートへと向かう。

「だから、そのイメージがわからないんだよ」

不意を突かれて、少女の体はびくと震えてその足が止まる。

男の声——それも、知っている声にすごくよく似ている。いや、

おそらく同一人物。

予期していなかった再会に、少女の鼓動が急ピッチでペースを上げる。

——あたしってわかるかな。わかるよね。一年ちよっと会わなかったただだし。

そう自分に言い聞かせつつ、けれど自分だとわからなかったらどうしようという不安に思考が乱れる。

——大丈夫。大丈夫！それにわからなかったら、あたしが美人になったからだし！

超ポジティブ思考にスイッチを入れて、少女は再び歩みを再開する。

「いち——」

ああつ、声裏返っちゃったよ。なんかあたしがすごい意識してるみたいじゃん。恥ずかしいなあ。

「一夏、いつになったらイメージが掴めるのだ。先週からずっと同じ所で詰まっているぞ」

「あのなあ、お前の説明が独特すぎるんだよ。なんだよ、『くいつて感じ』って」

「……くいつて感じた」

「だからそれがわからないって言って——おい、待てって第！」

すたすたと足を速める女子を、男子が追いかけていく。

——誰？あの女の子。なんで親しそうなの？っていうかなんで名前で呼んでんの？

さっきまでの胸の高鳴りは嘘のように消え、ひどく冷たい感情と苛立ちが雪崩れ込んでくる。

「……そこで何をこそこそしている」

そんな時、背後から声をかけられあたしはびくつと一瞬だけ体を震わせた。だってしょうがない、本当にいきなりだったんだもん。

「式、どうしたの？……あら？」

さらにもう一人、今まで一夏がいたIS施設から出てきた。式と呼ばれた女性は、面倒臭そうにそちらを見ると

「ああ、見かけない奴がいたから……ちょっとな」

とりあえず答えました。なんて感じに投げやりの言葉を放っていた。そのまま、またあたしに向きなると不審がつている事さえも隠さずに顔にあらわしていた。たぶんあたしの存在の有無関係なく現在彼女は機嫌が悪いのだろう。それで八つ当たりされているとしたらとても癪なただけだ。

「で、お前何？そんなでっかいボストンバックを夜中に引きずりまわしてるなんてさ」

男のような口調で式は問う。なんというか千冬姉みたいなタイプを相手にしている気分だ。

「まあ、ちょうどいいか。あたし凰鈴音。名前の通り中国人よ。で、なんで夜中に歩き回っていたかについていうのは、たった今このIS学園に到着したばかりだから。それで、総合事務受付の場所が分からずに歩きまわっていたら声が聞こえて……って感じね」

「ふうん、つまりあれか。転校生ってことか」

「そういうこと」

苦手なタイプっぽいけどまあ、それでもせっかく声かけてもらったんだし、訊ける事は聞こう。

「そうか、オレは両儀式。一応こう見えて一年だ。で……」

「私、黒桐鮮花。式と同じく一年よ。よろしくね」

「うん、よろしくね」

「じゃ、自己紹介も簡易だけど終わった事だし……。ついて来い、総合事務受付まで案内してやる」

そう言う確認も取らずに式は歩き出す。案内してくれるのとはとても助かるのだが、なんというかこうももう少し愛想が欲しいものだ。

「あー、ごめんね。式はいつもあんな感じだから」

うつろたえていると鮮花が囁いてくれた。よかった、鮮花の方は結構仲良くなれそう感じた。

「じゃっ、さっさと式を追いましょ？」

「う、うん！」

少し駆け足気味で式のあとを二人で追う。

それからすぐ、総合事務受付についた。アリーナの後ろにあるのが、本校舎だった。この時間でも明かりがついていた事は幸いだったというべきかな。

「ええと、それじゃあ手続きは以上で終わりです。IS学園へようこそ、ファシニイン 鳳鈴音さん」

哀想の良い事務員の言葉もあまり耳には届かなかった。何故かまたさっきの一夏の姿がフラッシュバックしてしまい、感情のコントロールがうまくいかなかったのだ。あたしは見るからに不機嫌ですとばかりに唇を尖らせながら聞いた。

「織斑一夏って、何組ですか？」

「ああ、噂の子？一組よ。鳳さんは二組だから、お隣ね。そうそう、あの子一組のクラス代表になったんですって。やっぱり織斑先生の弟さんだけはあるわね。あ、そういえば両儀さんと黒桐さんも一組よね？」

あたしの隣で一緒に話を聞いていた式はばつが悪そうにその言葉に頷いた。というか、一夏のクラスメイトだったのね。もしかして、

だからさつき遅れてとはいえ同じ施設から出てきたのだろうか。だが反応を見る限り、式はあまり一夏には興味がなさそうであった。ラッキーのような、複雑のような中途半端に心がもやもやする。

——でも少なくとも嫌いではないってことよね？一緒にいたんだろうから。

とりあえずクラスメイトだという式と鮮花にはまた少し興味が湧いた。だが今はそれより

「二組のクラス代表って、もう決まっていますか？」

「決まってるわよ」

「名前は？」

「え？ええと……聞いてどうするの？」

あたしの態度にすこしおかしいところを感じたのか、事務員は少し戸惑ったように聞き返す。

「お願いしようかと思って。代表、あたしに譲ってって——」

につこりとした笑顔にはばっちり血管マークがついていた。

そんなあたしに式は面白そうに見、鮮花は何事かと少し戸惑っていた。

隣のクラスの転校生（後書き）

うーパソコンのHDDが壊れた・・・。

というわけで古いパソコンを立ち上げる羽目になっている、どもデユオです。

テストや大会、検定もさることながら本当に暇がない。

その割には小説のかけもち量が半端ない><

と嘆いている最中です、はい

なかなか更新できず本当に申し訳ありません><

織斑一夏クラス代表就任パーティー

「というわけでっ！織斑くんクラス代表決定おめでとう！」

「おめでと〜！」

ぱん、ぱんぱん。クラッカーが乱射される。俺の頭に乗ってきた紙テープは、その実質重量よりもはるかに重く俺の心にのしかかっていた。

ちなみに今は夕食後の自由時間。場所は寮の食堂、一組のメンバーは式と鮮花を除いた全員が揃っていた。各自飲み物を手にやいのやいのと盛り上がっている。

「……………」

めでたくない。ちつともめでたくないぞ。なんなんだこのパーティーは。

ちらりと壁を見ると、そこにはデカデカと『織斑一夏クラス代表就任パーティー』と書いた紙がかけてある。そうか、就任パーティーか。……はあ。

式が来ないのは予想していたけど、鮮花まで来てくれないのは意外だ。というより、式。お前のせいでこんな事になってるんだから責任もってパーティーぐらい参加してくれよ。

「いやー、これでクラス対抗戦も盛り上がるねえ」

「ほんとほんと」

「ラッキーだったよねー。同じクラスになれて」

「ほんとほんと」

さっきから相づちを打っている女子は二組だった気がするんだが、気のせいだろうか。というか、おかしいだろ。明らかに三十名以上いるぞ、ここ。なんでクラスの集まりでクラスの人数越えてるんだよ。

「人気者だな、一夏」

「……本当にそう思うか？」

「ふん」

箒は鼻を鳴らしてお茶を飲む。なんでこいつは機嫌が悪いんでしようね。

「ごめ〜ん、遅れた！」

「鮮花！式！」

そんな時、救世主とはこれの事か。鮮花が式を文字通り引きずってやってきた。……式の奴、本当にだるそうだな。

「ちょっと転校生の子を案内してたら遅れちゃってねーごめんごめん」

へえー転校生が来たのか。どうせなら最初から入学しとけばよかっただろうに。

「はいはい、新聞部です。話題の新生、織斑一夏君に特別インタビューをしに来ました〜！」

オーと一同盛り上がる。オーじゃねえよ。オーじゃ。

「あ、私は二年の黛薫子。よろしくね。新聞部副部長やってまーす。はいこれ名刺」

受け取って、その名前を見る。画数の多い感じだ。書く本人は大変に違うない。

「ではではばり織斑君！クラス代表になった感想を、どうぞ！」

ボイスレコーダーをずっと俺に向け、無邪気な子供のように瞳を輝かせている。

「えーと……」

なんというか、俺はとても乗り気じゃないんだが、式に任命させられちゃったし、期待を裏切るわけにもいかない。どうせ弱い日本人ですよ、俺は。

「まあ、なんというか、がんばります」

「えー。もつといいコメントちょうだいよ。俺に触るとヤケドするぜ、とか！」

なんだそりゃ。えらい前時代的な台詞だな。

「自分、不器用ですから」

「うわ、前時代的！」

なんだと、日本国の誇る名優をブジョクする気か。

「じゃあまあ、適当にねつ造しておくからいいとして」

よくねえよ。こうやって情報発信者の独断と偏見が世に広まるのか。恐ろしい。

「大変だな、一夏」

げんなりしていると式が面白そうにこちらを見ている。くそう、もとはと言えば式が俺をクラス代表にするからこうなるんだ……。いやまあ、俺が式を推薦するなんていうからこうなった自業自得ではあるんだけどさ。

「ああ、セシリアちゃんと式ちゃんもコメントちょうだい」

……式ちゃんって。

「わたくし、こういったコメントはあまり好きではありませんが、仕方ないですわね」

とかなんとか言いつつ満更でもない……。っていうか、すぐ近くに控えてたな。心なしかいつもより髪の設定に気合いが入っている気がする。写真対策だろうか。

「コホン。ではまず、式さんと私の熱い試合の感想から――」

「ああ、長そうだからいいや。写真だけちょうだい」

「さ、最後まで聞きなさい！」

「いいよ、適当にねつ造しておくから。よし、織斑君に惚れたから
つてことにしよう」

「なっ、な、ななっ……！？」

ポツと赤くなるセシリア。きつと怒り心頭なんだろう。よし、こ
こは援護射撃だ。

「何を馬鹿なことを」

「え、そうかなー？」

「そ、そうですわ！何をもって馬鹿としているのかしら！？」

え、あれ？なんでセシリアが俺に怒るの？ていうか睨むな、怖い。

「だ、大体あなたは――」

「はいはい、とりあえず式ちゃんコメントよろしく！」

「そういう面倒なのは断る。一夏やセシリアと同じくねつ造すれば
いいだろ？」

「うわ、身も蓋もない事を……。だがそこが式らしいともいえないこともないな。」

「じゃあ、式ちゃんも織斑君が好きだからクラス代表を譲った…」と

「……………」

ピキン。

う、嫌な音がしたような……。

「おい、もう一度言ってみろ。誰が誰の事を好きだって？オレはこんな朴念仁なんて範疇にない」

「そ、それはさすがに傷つくぞ……………」

「まあまあ。式は他に好きな人いるもんね」

お、そうなのか……。もしかして鮮花のお兄さんとか？

「……鮮花だって人の事言えるのかよ」

ん、鮮花も好きな人がいるのかな？年頃の女の子だなーやっぱ。

「わっ私は……！」

「はいはい、とりあえず3人並んでね。写真撮るから」

「えっ？」

意外そんなセシリアの声。しかしどこか喜色を含んではずんでい
るようにも聞こえる。

「注目の専用気持ちだからねー。スリーショットもらうよ。あ。織
斑君を中心に式ちゃんが右で、左にセシリアちゃんよろしく！」

「そ、そうですね……。そう、ですわね」

なぜかモジモジとし始めたセシリアは、ちらちらと俺と式を交互
に見てくる。なんだろうか、この『チャンス到来、ただし安く見ら
れないように気をつけなくては』的な雰囲気。

「……………」

そして『さつき面倒な事は断ると言わなかったか？』と言わんば
かりに明らかに鬱陶しがっている式。

「あの、撮った写真は当然いただけますよね？」

「そりゃもちろん」

「でしたら今すぐ着替えて——」

「時間かかるからダメ。はい、さっさと並ぶ」

黛先輩は俺と式をひっ捕まえるように 主に式を 手を引いて、
そのまま手を握らせる。途中意味が理解できず、式が「はあ？」と
いった感じでポカンとしている。強引な先輩だ。そして、セシリア
さえもそれを見習い俺の手を掴んでいる。一体何がしたいんだ！？

「……………」

「？なんだよ？」

「べ、別に、何でもありませんわ」

こつちをじろじろと見てくるので何か用でもあったのかと思ったが、違ったらしい。紛らわしいやつだ。

「……………」

「……なんだよ、箒」

「何でもない」

こつちをじろじろ以下同文。

「それじゃあ撮るよー。35×51÷24は？」

「え？えつと……2？」

「ぶー、74・375でしたー」

なんだそりゃ。

パシャッとデジカメのシャッターが切られる。……って、おい。

「なんで全員入ってるんだ？」

恐るべき行動力をもって、一組の全メンバーが撮影の瞬間に俺と

セシリア、式の周りに集結していた。あ、箒と鮮花までいる。こいつらは一体何がしたいんだろうか。

「あ、あなたたちねえっ！」

「まーまーまー」

「セシリアと式だけ抜け駆けはないでしょー」

「クラスの思い出になっていいじゃん」

「ねー」

口々にセシリアを丸めこむようなことを言っている。なんで？

「う、ぐ……」

苦虫をかみつぶしたような顔をしているセシリアを、クラスメイト達や俺の隣にいた式がにやにやとした顔で眺めていた。……なんで？

ともあれ、この『織斑一夏クラス代表就任パーティー』は十時過ぎまで続いた。

やばい、女子のエネルギーを侮っていた。そう気づいた時にはもう夜はどっぴりとふけ、俺と式は妙に消耗して部屋へと帰還。式と鮮花の二人と別れ、ベッドに寝転がった。

「今日は楽しかっただろう。よかったな」

とげとげしい口調で箒が嫌味を言ってくる。なんなんだろうが、俺に喧嘩を売ってるんだろうか。最近、俺とセシリアに冷たい気がするんだが、箒。

「どこがだよ。疲れただけで、楽しいものか。お前は逆の立場なら嬉しいのかよ」

「むっ……。ああ、そうだな。楽しいかもしれないな」

本当はそうじゃないくせに、こいつは一過言い出すと引っ込みがつかなくなつて自爆する。そういうやつだ。適当に話は切り上げてやった方がいいだろう。これ以上おかしなことを言われても困るし。

「あつそう。じゃあ俺寝るわ」

「な、なに？まだ十時半ではないか」

「疲れたんだよ。そういうときは寝るに限る」

そう言つて布団に潜り込むと、突然枕が飛んできた。

「ぶべっ。——何しやがる！？」

「そ、それはこちらの台詞だ！今から寝間着に着替えるのだから、むこうを向いている！」

同居生活も一週間を超えるが、なんでこいつはいちいち俺がいるときに寝間着に着替えるのだろうか。俺が歯を磨いている間にすませればいいと思っんだが。事実、俺はそうしているわけだし。

「なあ、箒。前も言ったが着替えは俺がいないときに――」

ギロツ。

「わかったわかった。むこうを向いてますよ」

これだから女はよくわからない。とりあえず俺は体の向きをころりと変える。

「……………」

「……………」

そう、この沈黙がイヤなんだ。妙に時間が長く感じるし、ちょっとした衣擦れの音が異様に気になる。俺だって健全な十五歳男子なわけで、この落ち着かない感じは慣れない。

ぱさつとシャツを置く音が響く。以前目撃したシャワー上がりの姿が自然と脳裏に蘇ってきて、ますます落ち着かなくなる。

それからしばらくの間、何とも言えない着替えの音に翻弄された俺は眠るどころではなくなってしまうた。

「い、いいぞ」

お許しが出たのでまた体の向きを戻す。別にもう戻さなくてもいいんじゃないかと俺は思うんだが、前にそう言ったら箒が何故か怒ったのもう言わないことにしている。

「あれ？帯が新しいやつだな」

箒は寝間着浴衣を着用している。どこまでも和なやつだ。そういえば式も和服を部屋では身に纏っていたな。いや、いいと思うけど。ともかくその腰に巻いている帯が昨日までとは違うやつだったの
で、俺は何の気無しに指摘した。

「よ、よく見ているな」

あれ？気のせいだろうか、さっきまでのとげとげしさが無くなった気がする。それどころかちょっと上機嫌？よくわからんやつだなあ。

「いや、色も模様も違うから、そりゃ気づくだろ。箒を毎日見てるからな」

「そ、そうか。私を毎日見ている……か。そうかそうか」

？なんで上機嫌で何度も頷いているのだろうか。

「よし！では眠るとしよう！」

それが寝るやつのテンションかよ。おかしなやつだなあ。

ともあれ、箒も自分の布団に入って消灯、室内は途端に静寂に包まれる。

（うーん……寝るタイミングを逃してしまった）

睡眠というのは波があるので、それを一度逃すと次の波が来るま

でなかなかすんなりと眠れない。俺だけかもしれないけどさ。

「……一夏」

「うん？」

「さ、さっきは、その……なんだ。すまなかったな」

どのことに対してだろうか。考えても思いつかなかったので、

「いいよ別に。気にしてない」

とだけ返した。

「そ、そうか。それなら、いい。……で、ではなっ」

「おう。おやすみ」

少しずつ眠くなってきた俺は、今度こそその波を逃さずに睡眠へと落ちていく。

その日の夢は、なぜだか昔の事を思い出した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0265t/>

IS～境界式～

2011年7月3日20時20分発行